

秋色の少年は裁定者の 少女に恋をした

混沌の霸王

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

インフィニット・ストラトスが発表される数年前。冬木市と呼ばれる場所で聖遺物「聖杯」を奪い合う7人の魔術師と7騎の英霊、1人と1騎で行われた戦争。名は聖杯戦争。生き残ったのは僅か4人。生き残りの1人は封印指定を受けた人形師に弟子入りをした。

この時、この瞬間、秋色の少年の運命（Fate）が再び動き出した。

注意事項

※この作品はF a t e / G r a n d O r d e rをやつてたら思い付いた見切り発車の作品です。

※作者はF a t e以外のTYPE-MOONの作品はあまり知りません。故にキャラの性格がおかしい事もあるかもしれませんがご了承ください。

※この作品ではUBWルートを採用しています。

目次

秋色の少年は人形師の弟子になる。

I

師匠の人形師は横暴だった。

11

人形師は秋色の姉に会う

22

春色の少女の想い人は秋色の少年

34

秋色の少年は聖女を想い続ける

52

霊脈捜査

I
58

霊脈捜査

II
66

霊脈捜査

III
74

霊脈捜査

IV
83

霊脈捜査

V

91

霊脈捜査

霊脈捜査

集積学園

集積学園

集積学園

130

集積学園

集積学園

集積学園

集積学園

VI
100

了
109

I
114

II
123

III

IV
138

V
147

VI
156

了
163

秋色の少年は人形師の弟子になる。

朝日が草原を照らしだす。草原には腰まである豊かな金色の髪を三つ編みにし、所々に鎧が装着され、手には彼女を象徴する宝具の聖旗を持っている。

「秋。ここにでお別れです」

彼女は目の前にいる自身のマスターに別れを告げた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

10歳にも満たない子供は俯いたまま動かない。彼女はそんな彼を抱き締めた。

「秋。私はサーヴァント。聖杯戦争が終われば私が消えるのは定めなんです」

「イヤ・・・・・・・・ずつと一緒にいて、ルーラー」

「我が儘を言わないで。それに私はまた、秋と会える気がするんです」

「ホント・・・・・・・・?」

「はい。だから、泣かないでください」

「泣いてない」

「ふふふ・・・・・・・・そうですね。秋は強い子ですもんね」

ルーラーと呼ばれた少女は少年の頭を撫でる。

「私は今回の聖杯戦争に参加できて幸せです。秋の様な優しいマスターと共に戦えたんですから。それが例え、イレギュラーな形でも」

「ルーラー」のクラスは本来召喚されないエクストラクラス。そして少年は偶然、ルーラーを召喚し、偶然、魔導の世界に片足を突っ込んだ。

「秋。これは私からの贈り物です。そして、この贈り物に誓って必ず再会する事を約束します」

「これは……?」

ルーラーは少年に真っ白な布を羽織らせた。

「その布は私のスキルで作った聖骸布です。その聖骸布は真っ白な、何の変哲もない布。これからの秋の人生でその聖骸布は色を着け、模様を描き、聖骸布としての概念を得るはずですよ」

ルーラーは少年の目線に合わせるようにしやがんだ。

「嬉しかったんですよ? 私の生前の最後を悲しんでくれる人がマスターに為ってくれて」

ルーラーはエーテルを出しながら少しずつ体が透けていく。聖杯戦争が終わると座と呼ばれる所に英霊達は帰還する。

「だから……ごめんなさい、秋」

「うっ！」

ルーラーは少年の首筋を手刀で叩き気絶させる。ルーラーは気絶した少年を支えながら涙を流す。

「ごめんなさい．．．ごめんなさい．．．！貴方を危険な目に合わせて．．．！私が召喚されなかったら貴方は普通の生活を送れた筈なのに！普通の人生を歩めたのに！」

ルーラーは涙を流し、謝罪しながら少年を近くにある樹に凭れさせる。最後に聖骸布をかける。

「さようなら．．．．秋」

ルーラーは最後にそれだけ言うところの世界から去っていった。

—————

少年は一人、深夜の新都を彷徨い歩いている。少年は聖杯戦争の時に“寺の魔女”に言われた言葉が頭の中を埋め尽くしている。

『その子、2度と普通の生活に戻れないわよ』

少年は回りから姉兄と比較されていた。長女は生活能力が無い代わりに高い運動能

力を持つ。次女はそんな欠点を補うように生活能力が高い。長男は運動もでき、小学1年生ながらに小学6年生レベルの問題を解ける。それに比べて少年は勉強も運動も平均的。だから、少年は姉兄とは比べられない物を探した。そして行き着いたのが魔導の世界。それは本当に偶然だった。長女に入るのを禁じられていた蒸発した両親の部屋で見つけた魔術書には1ページを除いて全てが白紙だった。その1ページには魔法陣が書かれていた。少年はある晩、その魔法陣を庭先に描き、エクストラクラス「ルーラー」を召喚した。

「ルーラー……」

ルーラーは少年にとって初恋の人だった。だが、ルーラーは消えた。少年にとってそれは受け入れがたい現実だった。

「僕に帰るところなんて無いよ……」

少年はそう呟くと路地裏に入った。路地裏に入ると廃墟の入り口があった。少年は廃墟を見上げる。

「(ハハ)にしよ……誰にも見つからないだろうし」

少年は廃墟に入った。

「あ……あれ……?」

廃墟に入ってすぐに少年の視界は突然歪みだし、少年は倒れた。理由はストレスと起

きて今まで飲まず食わずから来た体力の限界からだ。

「あはは……死ぬの……かな？」

少年の体力を冷たいコンクリートの床が容赦なく奪っていく。

「これで……ジャンヌの所に行けると……良いなあ」

少年は段々と瞼を閉じていく。

「やれやれ……魔術協会からの刺客かと思つて鞆を持ってきたが無駄みたいだな」
瞼を閉じる前に見たのはオレンジ色の髪の毛の女性と旅行鞆大の匣だった。

「おい、子供。どうしてこの場所がわかった」

女性「……蒼崎橙子は倒れている少年に問いかける。しかし、少年は反応しない。」

「?おい、どうした」

橙子は倒れている少年に近づく。

「気絶しているのか?」

橙子は倒れている少年の体を調べる。

「呼吸が浅い……それに体温も低い。衰弱しているのか？」

橙子は少年を担ぐ。担いだ瞬間、少年が持っていたポシエツトから1冊の本が落ちた。本の表紙には剣十字が書かれている。橙子はその本を見た瞬間、驚愕により目を見開いた。

「ツー……どうして……どうして『夜天の書』を持っているんだ!？」

『夜天の書』。魔術協会により最大級の禁忌指定を受けている魔術書。夜天の書が禁忌指定を受けているのは本自体が魔力炉にして『他人の魔術を行使できる』からだ。例を言うなら魔術師Aが使った魔術を記録・解析して本の所有者が行使できるように変換する。魔術師からしたらたまたまっただけのものでは無い。代々受け継いで来た魔術を簡単に使われてはその魔術師の家系の努力は無くなったにも等しいからだ。

「これは……聞く必要があるな」

夜天の書は『数十年も前に魔術協会から盗まれた』。犯人は時計塔に在席していた1人の生徒。今でも魔術協会は犯人の行方を追っている。

「やれやれ……とんだ貧乏くじだ」

橙子は夜天の書を拾い上げ、階段を登って4階の事務所に向かう。橙子は事務所に入るとソファアーに少年を寝かせる。

「点滴をしておけば十分だろ」

橙子は何処からか栄養剤の入った袋と点滴棒を持ってきた。チャンバーから出てくる管の先の注射針を少年の静脈に刺す。

「これで良いだろ」

橙子は少年のポシエットの中身を出していく。ポシエットの中から出て来たのは、白い布に小銭入れ、さつき見つけた夜天の書だけだった。

「身元に繋がるものは無し……」

橙子は夜天の書を開く。

「何も書いてない？」

夜天の書は本来なら何千という魔術を記録している。だが、今の夜天の書には魔術の記録が一切無い。

「う……此処は？」

「目が覚めたか？」

「目が覚めたか？」

少年の目に写ったのは橙子では無く、夜天の書だった。

「返して……その本……返して！」

「断る。この本は危険な物だ。子供が持っていて良いものじゃない」

「関係……無い！その本を……返して！」

すると、橙子が持っていた夜天の書が少年の叫びに共鳴するように青黒く輝きだす。

「(共鳴している!?まさか、夜天の書があの子供を所有者として認めているのか!?)」

夜天の書は橙子の手から離れると少年の頭上に移動した。ページが勢いよく捲れていき、文字と絵が書かれていく。

「(マナを吸収しているのか!?)」

最後のページまで書き終わると閉じ、少年の腕に収まった。少年は夜天の書を大事そうに抱き締める。

「子供。お前は魔術師か？」

「子供じゃない」

「知らん。それより答えろ。お前は魔術師なのか？」

少年は幼いながらも橙子を睨む。

「安心しろ。もう、その本を奪ったりしない」

少年はその言葉を聞くと安心したのか睨むのを止めた。

「魔術師擬き……です」

「魔術師擬きか。名前は？」

「……秋」

「名字は？」

「……言いたくないです」

少年「……秋は俯いて拒絶した。」

「まあ、良い。その本は何処で手に入れた？」

「居なくなつた親の部屋……です」

「親？名前は？」

「確か……桃香と秋斗だったはず……」

「桃香と秋斗……秋斗？おい、顔をよく見せろ」

「ぶにゅ！」

橙子は秋の顔を掴んで凝視する。

「確かに……アイツの面影があるな。お前、魔術回路は何本だ？」

「40本って言われた」

「40本……はは、まさに『鳶が鷹を生む』だな。お前に興味が湧いた。どうだ？

私の下で魔術を学ばないか？それに、私の考えではお前、帰る場所が無いだろ？いや、正

確には『帰れない』、か？」

と履いていたズボン。

「おはようございます」

事務所に続く扉を開けると、珈琲を飲んでいる橙子。秋の方を目を点にして見ている片目を隠している男性と和服姿の女性がいた。

「おはよう。顔洗って来い」

「はい」

秋は橙子に言われた通りに事務所にある洗面所に入ってしまった……と、思ったから戻ってきた。

「どうした？」

「……届きませんでした」

秋の身長は120cm。事務所に設置されている洗面台の高さは約140cm。20cm、秋の身長が足りなかった。

「幹也……手伝ってやれ」

「え？あ、わかりました」

幹也と呼ばれた男性は近くにあった椅子を持って、秋の手を引いて洗面所に入ってしまった。

「おい、トウコ。あの子供はなんだ？」

「昨日拾った私の弟子だが？」

「拾ったつてお前……犬猫じゃあるまいし。親が心配してるだろ？」

「親ならアイツと姉兄を置いて失踪したらしい。まったく、あの歳の子供を置いて普通、失踪するか？」

橙子は苛立ちながら煙草をくわえて火をつける。橙子は秋の父、??秋斗とは同時期に時計塔に在席していた。??秋斗は良くも悪くも平凡な魔術師だった。魔術回路の数も20本と平均的に使用する魔術も強化の魔術を使える程度。それでも上を目指そうと努力する??秋斗に橙子は素直に感心していた。故に子供を置いて失踪した??秋斗の行動が信じられなかった。

「いや……上を目指す余り子供が邪魔になったのか？」

どちらにしても最低なのは代わり無い、橙子は声に出さずに内心で呟いた。

「先生」

橙子が内心で??秋斗の事を罵っていると秋と幹也が戻ってきていた。

「戻ったか。魔術の訓練は夜からだ。それまで、ゆっくりしている」

「わかりました。あの……先生。此方の2人は？」

「ああ、紹介してなかったな。お前の隣に居る片目を隠しているのはこの事務所の従業員、黒桐幹也だ」

「よろしくね」

「よろしくお願いします、黒桐さん」

「幹也で良いよ。えつと・・・」

「秋です」

「秋君だね。名字は？」

「・・・言いたくありません」

秋は俯いて拒否した。

「ソイツは訳ありだ。名字は聞いてやるな。その和服を着ているのは両儀式。私の使い魔代りだ」

「ふん・・・」

式と呼ばれた女性は顔を逸らした。

「式。ちゃんと挨拶しないとダメだよ」

「う・・・よろしく」

式は幹也に言われて渋々と挨拶した

「よろしくお願いします、両儀さん」

秋の式に対する第一印象はツンデレだった。

「ああ、そうだ。幹也と式。秋と一緒に服を買いに行け。金は私が出す」

「べ、別にそこまでしてもらわなくても……。時間を見計らつて服を取りに行きますから」

伽藍の堂がある新都から秋が住んでいた家は電車で1時間程の場所にある住宅街。聖杯戦争時は家からルーラーに背負ってもらつて冬木市まで移動していた。

「気にするな。魔術協会の妹の口座の金だからな」

「それ犯罪ですよね!？」

橙子の妹嫌いを知っている幹也と式は何事も無いようにしているがそんな事を知らない秋はツツコミを入れてしまった。

「そう言うわけだ。とりあえず行け。これは『先生』命令だ。お前に拒否権は無いからな」

「どう言うわけですか……」

弟子入り1日目にして不安に駆られる秋だった。

「今から魔術の訓練を始めろぞ」

「よろしくお願ひします、先生」

秋は幹也と式と一緒に服を買いに行つた。と、言つても上下の服と下着数着を買つただけですぐに帰つた。

「秋。お前はいつ、魔術回路を開いた？」

「えつと……ルーラーを召喚したのが2週間前だから。ちょうど2週間前です」

「2週間か……。秋斗が居ないからまともな訓練は受けてないな」

「あ、でも凜さんに少しだけ魔術の手解きを受けました」

「凜？誰だそれは？」

「聖杯戦争に参加していたマスターの1人で冬木の管理者（セカンドオーナー）？つて言つてました」

秋の頭の中にガンドを笑いながら撃つあかいあくまの姿が思い浮かんだ。

「ちよつと待て！お前、今、聖杯戦争つ言つたな！参加していたのか!？」

「はい。エクストラクラスの「ルーラー」を召喚して生き残りちゃいました」

「エクストラクラス……はは、お前はとことん規格外だな。よし、明日はその凜とやらに会いに行くぞ」

「あう……。ガンド撃たれそうで怖いです」

あかいあくまにガンドを撃たれないかで戦々恐々する秋。

「話が逸れたな。夜天の書を開け」

「はい」

秋は持っていた夜天の書を開き、中を見ていく。夜天の書には強化といった初級の魔術が載っていた。頁を捲つていくと見なられた女性の絵が書かれていた。

「あれ？どうしてセイバーさんの絵が……」

さらに頁を捲つていくと青い槍兵、紫の騎兵、紺の暗殺者、裏切りの魔女、鉛色の狂戦士が描かれていた。

「アーチャーさんだけ無い……」

仲間外れのアーチャーだった。

「これは……英霊か。だが、夜天の書は魔術を記録して使えるようにする魔術書だったはずだ。まさか、所有者によって内容が変わるのか……?」

橙子は夜天の書の変化を考察する。秋は夜天の書のランサーの頁を見る。

「ゲイ・ボルク……」

アイルランドの光の御子が使っていた魔槍。先に「心臓に槍が命中した」という結果を作つてから「槍を放つ」という原因を作る必殺の槍。余程、幸運が高くなければ必ず命中する。

「おい、秋。その槍どこから出した」

「ふえ?……ほわあ!」

いつの間にか秋の膝の上に赤い魔槍が乗っていた。

「せ、先生どうしましょう!?!これゲイ・ボルグですよ!?!ゲイ・ボルク!」

「わかったから振り回すな、バカ弟子!刺さったらどうするんだ!」

秋はゲイ・ボルクを危なっかしい手つきで振り回す。そんな秋を橙子が怒鳴る。第3者から見たら親子に見えるだろう。

「ごめんなさい……先生」

秋は橙子に怒られてシユンとしてしまった。

「はあ……まあ、良い。その槍をどうやって出した?」

「えっと……」

秋はゲイ・ボルクが出た時の事を思い出す。　「かつこいい」　「使ってみたい」　「何で全身青タイツなんだろう?」と考えていた。

「……」　「かつこいい」　「使ってみたい」　「って考えたら膝の上に乗っていました」

「『考えた?』投影したのか?それにしても魔力の反応が無かった……」。創造か?

いや、宝具の創造なんてそれこそあり得ない。なら模倣か?一番有り得るのは起源によるものか?」

橙子が秋が出した可能性があるゲイ・ボルクについて考察し始める。

「……」　「(ランクが下がってる?)」

秋の視界にはゲイ・ボルクの宝具としてのランクが映っている。『刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルク）』の本来のランクはB。秋の手にある『刺し穿つ死棘の槍』のランクはC+。1ランクダウンしている。『突き穿つ死棘の槍』のランクもB+からBにダウンしている。

「（ランサーさんが使っていないからかな？）」

秋はゲイ・ボルクのランクがダウンしているのは自分が担い手では無いからと考えた。

「よし、秋。他にも英霊の宝具が使えるかも知れない。まずはゲイ・ボルグを消せ」
「わかりました。（どうやってやるんだろう。消えろって念じたら消えるかな？）」

秋は消えろく消えろくと念じるとゲイ・ボルクはエーテルを出しながら消滅した。

「次はセイバーの宝具だ」

「あの……先生？魔術の訓練は……」

「そんなの後でも出来る。早くしろ」

「この先生横暴だ！」

「秋。お前は一つ勘違いをしている。魔術師という生き物は総して……横暴だ」
「そうでしたね!? すっかり忘れてましたよ!？」

橙子の言葉に朝どうようツツコミを入れる。こうして、??秋の前途多難な魔術師生活

21 師匠の人形師は横暴だった。

が
始
ま
っ
た
。

全力で振り下ろした。秋は余りの痛さに目を覚まし、悶絶した。

「寝るなど言つたらバカ弟子」

「それでも殴る必要は無いですよね!？」

「知らん。寝たお前が悪い」

「ううう先生の鬼！悪魔！スパルタママ！レオニダス1世！」

「誰がスパルタの語源を作つた国の王だ。もう一発喰らわせるぞ」

橙子は握り拳を作つて秋に見せつける。秋は「うっ」と呻き声を上げた。

「さつさと降りろ。凜とやらに会うぞ」

「は〜い……」

秋は渋々といった感じでシートベルトを外して車から降りた。玄関の前に行くと橙子が呼び鈴を押した。

「は〜い」

呼び鈴を押して暫くすると家の中から足音が聞こえてきた。扉を開けて出てきたのは衛宮邸の主、衛宮士郎その人だった。

「士郎さん。お久しぶりです」

「秋じゃないか！今まで何処に行つてたんだ!？」

「あはは……魔術師に弟子入りしてたんです」

秋は橙子を指差す。

「僕が弟子入りした魔術師の蒼崎橙子さんです」

ゴツチン!!

「指を指すなバカ弟子」

「殴らなくてもいいですよね!?あと、ごめんなさい!」

士郎は秋と橙子のやり取りを見てビックリしている。

「え、えつと……初めまして。衛宮士郎です」

「蒼崎橙子だ。ふむ……お前も魔術師の様だな」

橙子は士郎の事を魔術師と見抜いた。

「しろーうー!お茶くー!」

「凜……とりあえず上がってください」

士郎は秋と橙子を居間に案内した。

「凜さん」

「秋!?アンタ今まで何処に居たのよ!」

凜も士郎と同じことを言った。

「先生。この人が遠坂凜さんです」

「遠坂……御三家の1つか。確かに才能はあるな。いささか優雅さに欠けるがな」
「橙子は凜を観察するように見る。凜の格好は寝転びながらフアッション雑誌を読んでいる、起き上がった状態だ。遠坂家の家訓『常に優雅たれ』の欠片も無い。」

「初めましてだな、冬木の管理者。私は蒼崎橙子。そのバカ弟子の師匠だ」

「蒼崎……橙子？」

「凜は蒼崎橙子と繰り返し返して呟く。」

「蒼崎橙子って……も、もしかして封印指定の人形師、蒼崎橙子!？」

「ほお、私も有名になった物だな」

「僕、先生って仕事しないヒツキーだと思ってきました。そんなに有名な人なんですな」

「ゴツチン!!」

「いったあゝゝゝ!?」

「誰がヒツキーだ、バカ弟子」

「学習しない秋だった。」

「それで？封印指定の人形師が私に何のよう？」

「もきゆもきゆ（猫被つてない……）」

凜は初っぱなから素の状態で話を聞く体勢でいる。秋はそんな凜を煎餅を食べながら見つめる。

「なに、バカ弟子が聖杯戦争に参加していたと聞いてな。生き残りの参加者に興味が湧いたんだ」

橙子は煙草をふかしながら答える。

「弟子って……秋、この人に弟子入りしたの？」

「もきゆもきゆ……ゴックン。はい。先生に弟子入りしましたよ。……まともにも魔術の事は教えてくれてませんけど」

秋は橙子をジト目で睨む。

「今日からちゃんと教えてやる。だから、黙って煎餅でも食ってろ」

「は〜い！」

橙子の言葉に納得した秋は煎餅を頬張る。

ふーんふーんふーんふーん

「ああ、すまない。私だ」

橙子はポケットからケータイを取り出し、メールを確認する。秋と士郎は普通に機械を使いこなしている橙子に驚いた。

「(魔術師でも機械使える人がいるんだ)」

身近に機械音痴が居る分、士郎の驚きは大きいだろう。

「……少し出掛ける。悪いが2時間ほど秋の面倒を頼む」

橙子はケータイをしまうと立ち上がった。秋は橙子の服の裾を掴んだ。

「離せバカ弟子」

「……」

橙子は離すように言うが秋は手を離さない。秋の手は僅かに震えている。

「はあ……安心しろ。必ず戻ってくる。だから、大人しく待っている、秋」

「あつ……」

秋は「置いていかれる」と言うことにある種のトラウマを抱えている。ジャンヌ・ダルクという短い間だったが心の支えを失った秋はかなり不安定な状態にある。そんな

秋を橙子は知ってか知らずか安心させるように頭を撫でた。

「……………はい！」

秋は笑顔になり、手を離した。

「良い子だ」

橙子は微笑み、衛宮邸から出ていった。

「意外……………封印指定って聞いてたからもつと怖い人と思ってたわ」

「人を見かけによらないってことだな。凜みたいに」

「ちよつと！…どういう意味よ！」

「言葉の通りだと思いますよ」

バシユン！バシユン！

秋と士郎の顔の真横を赤黒い弾丸が通り過ぎた。撃つたのは笑顔で指鉄砲の構えをしている凜。ガンドと呼ばれる北欧が起原の魔術。使い手の魔力により物理的破壊ができる魔弾にもなる。

「ふ、ふふ……………言ってくれるじゃない2人とも」

凜はゆつくりと立ち上がった。

「童心に帰って鬼ごっこをしましょうか2人とも。鬼（狩人）は私ね？逃げる（獲物）のは2人。さあ、逃げなさい。10秒だけ待ってあげるわ」

この時、ようやく2人は悟った。『逃げないと自分たちは狩られる』つと。そうなれば2人の行動は早かった。士郎は急いで縁側まで逃げて窓を開け、庭に逃走。秋は反対に玄関の方に逃げた。

「待ちなさい士郎おおおおおおお」

「なんでさあああああああああ」

凜は士郎を追ったようだ。秋は内心で士郎に謝りながら玄関近くの茂みに身を隠してほとぼりが冷めるのを待つことにした。

—————

橙子はある場所に向かっていく途中、メールの内容を思い出す。メールの送り主は幹也だった。メールの内容は秋に関する事だった。

『秋君の身元がわかりました。名前は織斑秋。電話番号と兄妹の写真を乗せておきますね』

そのメールを確認した橙子は車に乗るとすぐにメールに書かれていた番号に電話、会

う事を取り付けた。

「秋の話だと兄妹が居るんだったな。全員で来るか。1人で来るか」

橙子は喫茶店の隣にある駐車場に車を停める。

「ふむ……」

橙子は店内を見回す。

「(見つけた)」

店内の奥に呼び出した相手が座っていた。呼び出した人物は中学生か高校生ほどの少女だった。

「いらっしやいませ！お一人ですか？」

「いや、待ち合わせだ。それとホットコーヒーを1つ頼む」

「かしこまりました！」

ウェイトレスは厨房に戻っていった。

橙子は待ち合わせをしている人物が座っている人物の席にまで行き、椅子に座る。

「お前が秋の姉か？」

「貴女が……」

少女は橙子の事を睨む。

「(睨みは秋の方が上だな。こいつには『必死さ』が足りない) 私は蒼崎橙子。お前の弟

を保護した者だ」

「……………織斑千冬です。この度はありがとうございます」

「（親に捨てられて大人を信じられない……………そんな目をしているな）単刀直入にいう。お前の弟は私が引き取る」

橙子の言葉を聞いた千冬は目を見開き、硬直した。

「お待たせしました。ホットコーヒーです」

ウエイトレスは注文した商品を置いて厨房に戻っていった。

「どういう……………意味ですか？」

「言葉の通りだが？」

絞り出すよう呟いた千冬の言葉を橙子は切り捨てた。

「お前たち姉弟の事情は秋から聞いている。だから、これから『重荷』になるであろう弟を私が引き取ると言ったんだ（何より私の弟子だしな）」

「ふざけるな！何故、赤の他人のお前がアイツを引き取るんだ！」

千冬は激怒する。回りの客も何事かと橙子達の方に注目する。

「逆に聞くが小娘1人で何人いるか知らんが弟妹を養えるのか？」

橙子は煙草を取り出し、吸い始める。

「私が3人を守っていく！お前たち大人の救いなどなくても暮らしていける！」

「社会を舐めるなよ小娘。中学か高校かは知らんが大人の援助無しで暮らせていけると思ふな」

橙子は冷静に正論を述べていく。

「私たちを捨てた親と同じ大人など信じられるか！」

「……………」
『織斑秋斗』

「っ!？」

赤の他人の橙子が自身を捨てた親の片割れ、父親の名前を言われたことに驚き、今日二回目の硬直を起こした。

「あのバカとは同期だな。顔見知りの仲だったよ」

橙子はホットコーヒーを飲み、喉を潤す。

「だから、これは私なりの優しさだ。これから先、必ずお前は弟妹の誰かを捨てる事になる。なら、早めに決めておいて損はない」

橙子は煙草を灰皿に押し付ける。

「それに……お前の所に居てもアイツの才能は延びない。輝かない。腐っていく一方だ。そんな事は私が認めない」

それは秋の魔術師としての才能を一目で見抜き、育て上げる事を選んだ橙子だから言える。

「決めたらこの番号に電話してこい」

橙子は電話番号が書いてある紙を置いて、会計を済ませて帰っていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

残された千冬は唇を噛み締めて俯いていた。

春色の少女の想い人は秋色の少年

夜の新都。大通りから外れた道は人通りが少なく、街灯も少ないせいで薄暗い。そこを一人の少女が歩いている。

「あんな家……二度と帰らない！」

黒髪を胸元まで伸ばし、何処かの中学校の制服を着ている。

「秋……」

少女は「行方不明となっている」同じ歳の弟の名前を呟く。少女の名前は織斑春華。

「……?」

大通りに通じる道からヨロヨロと男性が歩いて来た。

「(酔っぱらいかな……?)」

春華はそう結論付けて男性の横を通りすぎようとする。

「が、があああああ!!」

「っ!?!」

男性は突然、奇声を上げて春華に右手を大きく振り上げて襲い掛かる。春華は奇跡的に避けることが出来たが、制服の肩の部分を引き裂かれた。

少年は壁に突き刺さった剣を抜くと刀身が消えるのを確認して袖口に直して大通りの方に歩いて行こうとする。

「待って！」

春華は少年に声をかける。此処で別れると2度と会えない。そんな気がしたからだ。

「秋……だよな？」

少年は溜め息をついてフードをとる。月明かりに照らし出されたのはまだ、幼さを残した顔にフードで隠されていた黒髪。春華が探し求め、恋い焦がれた弟“織斑秋”だった。

「久しぶりだね……春華」

秋は春華に微笑む。

「あつ……」

春華は涙を流す。嬉しかった。寂しかった。会いたかった。様々な感情がごちゃ混ぜになり、自分の心を制御出来なくなった。

「秋うううううう!!」

春華は走って秋に抱きつく。

「わぷっ！」

春華は秋を抱き締める。春華の身長は中学生にしては高い150cm。秋の身長は1

40 cm。秋の頭は春華の発育の良い胸に埋もれる事になった。

「（これからどうしよう・・・）」

秋は抱き締められながらそんな事を考えていた。

「で、連れてきたのか？」

「はい・・・」

秋は抱き付いて離れない春華を連れて伽藍の堂に戻った。

「はあ・・・バカ弟子が。何のための結界だと思っている」

「返す言葉もございません・・・」

秋は橙子の前で正座している。

「あ、あの・・・」

春香はおずおずといった感じで話しかける。

「ん？ああ、すまないな。私は蒼崎橙子。このバカ弟子の保護者兼教師だ」

「お、織斑春香です・・・」

「織斑・・・あの女の妹か」

橙子は煙草に火をつける。

「バカ弟子。今日狩った死徒はどうだった？」

「中途半端な状態で食屍鬼（グール）から吸血鬼になったみたいですね。あの程度なら黒鍵で十分です」

秋は立ち上り埃を払う。

「そうか……。ご苦労だった。シャワーを浴びてこい」
「わかりました。また、後でね春華」

秋は事務所にある自室に戻っていった。

「バカ弟子は行つたな。さて……。織斑千冬は元気か？」

「はい。今はIS学園で教師をしています」

「ほお……。あの小娘が教師か」

橙子は煙草の灰を灰皿に落とす。

「蒼崎さんは秋の保護者……。なんですよね」

「ああ」

「秋にいったい何があつたんですか？それに、死徒とか食屍鬼（グール）って何なんですか！」

春華は橙子を問い詰める。

「良いのか？秋の今までを聞いたら戻れないぞ。このまま聞かずに帰った方が良いと思うかもしれない。それでも良いのか？」

「構いません。私は秋のお姉ちゃんですから」

春華は即答した。秋の姉として。何より恋した異性の事をもっと深く知りたい。そんな感情から「興味本位」で聞くことにした。

「そうか……。まず、アイツの名前は蒼崎秋。戸籍上は私の息子扱いだ。この事に關しては織斑千冬も了承している。良いな？」

「……………」

春華は唇を噛み締めた。

「アイツに何があつたかだな。秋は聖杯戦争と呼ばれる戦争に参加していた」

「聖杯……戦争!？」

「そうだ。聖杯戦争は名前の通り万能の願望機「聖杯」を奪い合う7騎のサーヴァントと7人の魔術師で行う殺し合いだ」

「ま、待つてください！魔術師ってお伽噺の存在ですよ？実在するわけない無いじゃないですか！」

春華の意見も最もだ。魔術師や魔法使いは一般人からしたら空想の産物でしかない。

「それが存在するんだよ。私も魔術師だし秋も魔術師だ。それにお前の父親も魔術師

だ。お前にも魔術師としての才能があるんじゃないか？」

「私の父親も……」

「話を続けるぞ。詳しい経緯は秋に聞けば教えてくれるだろうから私は何も言わないがアイツを拾ったのは聖杯戦争が終わった直後だな。このビルの一階で気絶している所を拾った。色々あつて秋は私に弟子入りした。こんなところだな」

「ま、魔術師がいるとしてどうして秋が戦争に参加したんですか!？」

「偶然らしい。親の部屋にあつた魔術書を使ってイレギュラーな8騎目のサーヴァントを召喚したと言っていたな」

橙子は短くなった煙草を灰皿に押し付けて新しい煙草をくわえる。

「次は死徒が何かだな。簡単に言ってしまうえば吸血鬼だ。食屍鬼は死徒に血を吸われた人間が死後、数年かけて動く死体(リビングデット)に成る。そして、食屍鬼は回りの死体を喰らい、欠けた肉体を取り戻していく。そこから、また数年かけて霊体の脳を形成して知識を取り戻す。これで吸血鬼と呼ばれる存在の完成だ」

「そ……そんな危ない存在と秋を戦わせてるんですか!？」

「危ない……か。アイツにとって死徒なんて存在は生きた魔術師30人を同時に殺すより簡単だ」

「殺……す?」

春華の頭の中に最悪のイメージが浮かび上がってきた。

自分の弟がそんな事をするわけがない。でも、襲ってきた吸血鬼を倒した。信じたくない。信じられない。春華の頭はどんどん混乱していく。

「そうだよ。僕は魔術師を……人を殺した」

自室からタオルで頭を拭きながら秋が出てきた。

「しゅ……う?」

「何人も、何十人も殺したよ。抵抗する魔術師も。逃げる魔術師も。命乞いする魔術師も。全員殺した。依頼って言うのもあるけど何より僕自身が人を殺す事が、"楽しい"んだよ」

春華にとって信じたくない事を秋自ら認めた。

「嘘……だよね? 秋はそんな事しないよね」

「嘘じゃないよ。この手、この身はもう血で汚れてるんだ」

秋は自分の手を見つめる。

「初めて人を殺した時は一晩中眠れなかった」

「そうだったな。帰って来たと思ったら血塗れで青ざめて今にも死にそうな顔をしてい

たな」

「そうでしたね。2人目には特に抵抗なく殺せた。10人目を殺した頃には人を殺す事が愉しく感じ始めた」

春華は秋の話を聞いていく内に涙目になっていく。聞きたくない。知りたくない。春華の頭は秋の話を拒絶しようとする。そして、それに拍車を駆けるように秋が最後の言葉をいう。

「春華。僕と君が生きている世界も、見ている世界も違うんだ。だから、2度と此処（伽藍の堂）に来たらダメだ」

「……………っ!!」

春華は涙を流しながら伽藍の堂から走って出ていった。

「良いのか? 追いかけて」

「良いんですよ。僕は人殺しですから。何より、春華には魔導の世界には踏み込んでほしくないんです」

秋はそれだけ言って自室に戻った。

「まったく……………難儀な性格だな」

橙子は煙草を灰皿に押し付けて事務所から出ていった。

「ジャンヌ……」

自室に戻った秋は窓から見える月を眺めていた。

「今の僕を見たら君は怒るだろうね」

もし、この場に自分が恋した最愛の女性が居たら怒られると考えた。

「でもね……生きている事が辛いんだよ。君が居ない世界で8年。僕を殺せる魔術師も、死徒も、誰一人として居ない。そのくせ自殺する勇氣も無い。僕はね臆病者なんだよ……」

橙子の前では決して吐かない弱音。愛した女性が居ない世界で8年。秋には余りにも長い年月だった。死徒を狩り、討伐対象の魔術師を殺し、自分を殺せる存在を探している。だが、そんな存在は何処にも居ない。どれだけ優れた魔術師も夜天の書に記されている。『破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）』を使って魔術を無効にしてしまえば唯の人間に墮ちる。後は心臓を突き刺してしまえば肉と血で出来た肉塊が残るだけだ。

「君に会いたいよ……ジャンヌ」

秋は部屋を照らす月を涙を流しながら眺めていた。

『春華。僕と君が生きている世界も、見ている世界も違うんだ。だから、2度と此処に（伽藍の堂）に来たらダメだ』

家に帰った春華は自身の部屋のベッドに顔を埋めながら秋に言われた言葉を思い出す。

「（秋……どうして、どうしてそんな事いうの？）」

春華は秋に依存している。春華にとって家族はISが世に出てから持て囃される姉でもなく、同じ歳で好青年の皮を被って裏で何をしているか分からない兄でもなく、秋だけだと思っている。秋が行方不明に成ってから是一年以上落ち込んでいた。

「ダメ……ダメなの。私は秋が居ないと何も出来ないんだよ……私を一人にしないでよ」

春華は起き上がり、体育座りになりながら枕を抱き締める。

「……逃げちゃダメ。秋が魔術師って存在で人を殺したのも本当。なら、私はその事実を受け止めなくちゃ。だって、私は“秋のお姉ちゃん”だもん！」

春華は枕をベッドに投げ捨てて立ち上がる。

「よ……よ……」

春華はクローゼットから旅行用バックを取り出し、荷物を詰めていく。

「待っててね、秋！」

織斑春華。座右の銘・思い立ったが吉日

—————

春華が秋の事実を知った翌日。秋は変わらず自身が通っている中学校で授業を受け、放課後にまで時間が過ぎた。秋は今夜も死徒狩りに行くため速めに帰ろうと、下駄箱の前にいる。

「(今日も黒鍵15本あれば充分かな)」

秋は靴に履き替え、上靴を下駄箱になおして昇降口から出ていこうとする。

「あ、秋君！」

すると、呼び止められた。秋は振り返るとそこには水色の髪に紅色の眼をした2人の少女が立っていた。

「更織さんに更織先輩……」

更織楯無と更織簪。更織楯無は秋の1つ歳上の先輩。更織簪は秋と同級生。そして、2人とも古くから続く魔術師の家系だ。

「もう！楯無で良いって言ってるじゃない！たっちゃんでも可」

「私も簪って呼んでほしい」

実はこの3人。かなり古くからの付き合いだったりする。

「君たちもしつこいよ。絶対に呼ばないからね」

この名前を呼ぶ呼ばないの攻防は初めて会ったときから続いている。

「そういえば布仏さんは？」

「本音は風邪で休んでる。私の魔術の練習でびしょびしょになったから……」

更織家の魔術属性は水。稀に他属性の魔術属性を持った子供が生まれる。

「あ、秋君。黒鍵の補充は必要ない？」

「大丈夫だよ。最近は食屍鬼と吸血鬼の成り立てとしか戦ってないから補充の必要は無
いよ」

秋は死徒を聖堂教会の代行者と同じ方法で葬っている。稀にとある英霊の宝具の弓と魔術で視力を強化、黒鍵で狙撃する事もある。そして、黒鍵の補充、魔術師討伐の依頼などは更織家から秋に流れるようになってる。

「ごめんなさい。貴方にばかり汚れ仕事を押し付けて……」

「別に良いよ。僕がしたくてしてる事だから」

本来なら冬木市一帯に入り込んだ討伐対象の魔術師は更織家が抹殺するのを先代の

“更織楯無”が娘達の手を血で染めさせない為に秋を雇った。楯無と簪はその事実を負い目を感じている。一方の秋は実戦経験を積める事と魔術師を殺れる事で充分満足している。

「それでもよ。私たち姉妹は貴方に感謝しているの。それだけは分かっている欲しい」
「うん。だから、私の名前を呼んでほしい」

「はあ……取り敢えず感謝の気持ちは受け取っておくよ。名前は呼ばないけど」
何だかんだでこのやり取りを秋は気に入っている。3人は話ながら正門を出てすぐの交差点で止まった。

「あ、更織さん。魔眼の調子はどう？頭痛とか無い？」

「大丈夫。橙子さんがくれた“魔眼殺し”のお陰で体調に問題ないよ」

「そう。体調が悪くなったら伽藍の堂おいで。先生にも言っておくから」

「うん。ありがとう、秋」

簪は先天的に魔眼を持っている。魔眼の名は“近未来視の魔眼”。数秒先の未来を視ることができる魔眼。

「しゅーしゅーしゅー!!」

信号が変わるのを待っていると向かい側の歩道から秋を呼ぶ声が聞こえた。秋は向かい側の歩道を見ると眼を見開いた。

「は、春華……!」

珍しく秋は動揺してしまった。楯無と簪は動揺している秋を不思議そうに見ている。向かい側の歩道には膝下までのスカートに長袖のブラウス、その上からコートを羽織っている。肩に旅行用バックを下げ、キャリーケースを引っ張っている春華がいた。

「ごめん!先に帰るね!」

秋は信号が青に変わると走って向かい側に行き、春華の腕を掴んで走り去って行った。

「……秋。名前で呼んでたね」

「ええ……呼んでたわね」

残された2人の回りには嫉妬の嵐が吹き荒れていた。

—————

伽藍の堂に春華を強引に連れていった秋は春華に詰め寄った。

「どうして僕が通ってる中学が分かったの!?!」

「蒼崎さんが教えてくれたんだよ」

「はあ!?! 先生が教えた!?! 本当なんですか先生!!」

秋は煙草を吹かしている橙子に聞く。

「ああ、私が教えた。何か問題あるか?」

橙子は悪びれずに言った。

「問題だらけですよ!! どうして教えたんですか!?!」

「弟子のメンタルケアは師匠の役目だからな。電話番号を教えておいた」

昨晚、橙子は春華を追って伽藍の堂の電話番号を教えていた。

「秋。私は秋が魔術師って事も、人を殺したって事も受け止めたの。だから、私は秋の側にずっと居るよ。秋を独りになんてしないから!」

その言葉は春華の決意。愛した少年の事実を受け止め、独りにしない為の決意。

「もう、勝手にしてください!!」

秋は事務所の自室に入っていた。

「今日からよろしくお願いします、蒼崎さん」

「ああ。部屋はバカ弟子と一緒に良いだろ?」

「はい!」

春華は満面の笑みを浮かべながら秋の自室に入っていた。

「やれやれ……この事務所もだいぶ賑やかになったな」

そう言う
橙子の
口元は
笑って
いた。

秋色の少年は聖女を想い続ける

春華が伽藍の堂に転がり込んで一ヶ月。伽藍の堂は一変した。春華が転がり込む前の伽藍の堂は書類や設計図が散乱していた。社員の幹也が片付けをしてはいたが、片付けをするスピードより散らかるスピードの方が早く、負けてしまった。春華が来たことにより、伽藍の堂は整理整頓が行き届いた事務所に生まれ変わった。この事に黒桐幹也は感動し、涙を流しながら、

「ありがとう……本当にありがとう！」

春華の手を握りながら礼を言うほどだった。そんな春華は今、

「お昼できましたー！」

三人分の昼食を作っていた。伽藍の堂の食事は春華が来てから全ての炊事洗濯家事掃除を受け持っている。

「もう！ 橙子さんも図面書くの止めてこつち来てくださいー！」

「あー、わかったわかった。お前は私の母親か？」

伽藍の堂の主、蒼崎橙子は煙草を加えながら料理が置かれているダイニングテーブルの前に近寄る。

「今日は炒飯か」

「はい！私は秋を起こして来ますね」

春華の事務所に隣接している秋と春華の部屋の扉を開く。部屋の中はベッドが二つ、片や綺麗に整頓されたベッド、片や羊皮紙や英語で書かれた本が散乱しているベッド。そして、机の上で本に埋もれながら寝ている春華の弟。

「秋。お昼ご飯出来たよ？」

春華は怪しい本を退かし、秋の体を揺する。

「んっ………あと」

「あと？」

「あと………魔術王が人理焼却するまで」

「いつそれ!?それと誰、魔術王って!?人理焼却なんて物騒なこと言わないの!!」

春華は寝言で物騒なことを言っている秋の頭をどこからか取り出したハリセンで叩いた。なお、ハリセンにはエクスカリハリセンと書かれている。

「んあっ………?もう、朝？」

「朝じゃなくて昼だよ！ほら、顔洗って来て。お昼ご飯出来てるから」

秋は背中を伸ばしながら立ち上がり、洗面所に入っていった。春華はハリセンをベッドの下に入れ、洋服ダンスから秋が今日着る服を取り出していく。していることが完全

に母親である。

「今日は昨日より寒いからヒートテックと……」

春華は取り出した服を秋のベッドに置く。

「服だしてくれたんだ」

顔を洗い終わった秋が戻ってきた。

「うん。居候してる身だからね。これくらいいしなないと」

（それに……こうゆうことしてると、ま、まるで夫婦みたいだし）

春華は普段、学校では品行方正な生徒で教師からの信頼も厚い。だが、実際は秋のこ
とになると脳内が桃色になる。そんなことを露知らず、秋は寝間着を脱いでいく。

「……………」

春華は秋の生着替えを顔を赤くしながら凝視していた。

「……………いつまで見てるつもり？」

「つ！こめんね！？！すぐに出るから！！」

春華は慌てて部屋から出ていった。

—————

「ああ、そうだ。秋。依頼が来てるぞ」

昼食中、秋の対面に座っている橙子は懐から封筒を取り出し、秋に渡した。秋は封筒の封蝋を破り、中身を取り出す。

「これは……また、時間がかかりそうな依頼ですね」

秋は食事中ということを忘れ、手紙の内容を読んでため息を吐いた。

「先生。しばらく学校の方は休みます。更識からの依頼も全て断っておいてください」

「ほお……？お前がそこまで言うほどか？」

「ええ。どうも面倒な案件みたいです」

秋は読み終わった手紙を折り畳んで、破いた。

「内容は？」

「……冬木一帯で霊脈の乱れあり。至急調査されたし」

「それだけか？なら、学校を休む必要は無いだろ？」

「続きがあるんですよ。どうも、この霊脈の乱れは人為的みたいです。もしかしたら……もう一度、聖杯戦争が起きるかも知れません」

「なに……？」

橙子は秋の言葉に聞き返す。

「待て、馬鹿弟子。聖杯はお前が参加した聖杯戦争で破壊されたんだろ？何故、その結論

に至る?」

「僕も詳しいことは凜さんから聞いてないんですけど、セイバーさんが破壊したのは小聖杯と呼ばれるアインツベルンが用意した子機みたいな物らしいんです。そして、親機に当たる大聖杯はこの冬木の何処かにあるらしいんです」

「なるほどな……お前はアインツベルンがまた、聖杯戦争を始めようとしていると思ってるんだな?」

「はい。でも……可能性は低いと思いますけどね。アインツベルンは前の戦争で最高傑作のホムンクルス『イリヤスフィール・フォン・アインツベルン』を失って、そこまでの余力は残ってないと思います」

秋はそれだけ言う立ち上がって、近くに置いてある夜天の書を手に取る。

「でも……もう一度聖杯戦争が起きたなら、『彼女』に会えるかも知れないんですよね」

秋は最後に呟いて、伽藍の堂から出ていった。

「やれやれ……いまだに引きずっているのか、アイツは」

「あの、蒼崎さん。秋が言っていた『彼女』って誰ですか?」

「……まあ、構わないか。アイツは今も一人の女に惚れ込んでいる。聖杯戦争でアイツのサーヴァントだった、ルーラーにな」

「ルーラー……」

春華は自身のライバルの名前を呟く。

「お前も聞いたことがあるんじゃないか？ 英仏百年戦争のおり、旗を振り、兵士達を鼓舞した救国の聖処女。オルレアンの乙女ラ・ピュセル、ジャンヌ・ダルク。それがアイツの心を今も縛り続けている女だよ」

靈脈捜査

I

橙子は炒飯を食べ終わり、煙草に火を着ける。

「アイツはジャンヌ・ダルクが好きで好きでしようがないんだ。それこそ、聖杯が無くてもジャンヌ・ダルクを召喚できるか探すぐらいにな」

春華は黙って橙子の話を聞く。

「昔、私は秋の起源を調べたことがある」

「……起原ってなんですか？」

「むっ……そう言えばお前は魔術に関して何も知らないだった。起原は存在全てに刻まれた絶対命令だ。起原が魔術に影響することはあるが、秋が使う魔術はそれが顕著だ」

橙子は何かを思い出すように窓の方を見る。窓から見える景色は、橙子が秋を拾ったあの夜から何一つ変わっていない。

「アイツの起原は『自壊』。自分で自分を壊すことを表している。アイツの魔術は使えば使うほど自分の体を壊していく」

「そ、そんな危ない物を使ってるんですか!？」

春華はテーブルを叩く。橙子は素早くコップを持ち上げる。

「今すぐ使わせるのを辞めさせてください!!」

「何故だ？」

「何故って……秋は蒼崎さんの子供ってことになってるんですよね!?なら、親として子供のことが心配じゃないんですか!？」

「生憎と私はそこまでの情は持ち合わせていない。アイツも魔術師だ。それぐらいのリスクは承知の上で魔術を行使している」

橙子は煙草から立ち上る煙を見つめながら話を続ける。

「アイツは起原のせいにか死に急いでる所がある。自分が死ねばジャンヌ・ダルクに会えるとも思ってるんだろうな。……そんなことをしても無駄だと分かっているだろうに」

「……なら、何で秋は魔術師なんてしてるんですか？」

「ジャンヌ・ダルクとの唯一の繋りだからだろ?秋の支えはそれだけだからな」

春華は納得していないような顔をしながら座る。橙子は短くなつた煙草を灰皿に押し付けて火を消す。

「だから、お前も深くは秋に踏み込むな。いくら姉だつと言っても、秋は容赦なく春華、お前を殺す」

橙子の言葉に春華は絶句した。そして、確信していた。秋ならやりかねないと。

「()でも無い……か」

秋は一人、冬木市の主だった霊脈が通っている場所を調べている。冬木市は日本でも有数な霊脈地だ。霊峰富士・日光東照宮に次ぐ霊脈地であることから魔術協会と聖堂教会から眼をつけられている。

「セカンドオーナー管理者の凛さんはイギリス留学中……更識からの情報が流れて来ないってことは知らないってことなのか……外来の魔術師と繋がっているのか」

秋と更識家は協力関係を築いているが、一枚岩とは言えない。現更識楯無と妹の更識簪は秋と橙子とは懇意な関係を築いているが、更識内部には橙子を捕縛して魔術協会に引き渡すべきだと言う派閥が存在する。その筆頭が前更識楯無・更識刀夜である。

「まあ、どっちでも構わない。もし、先生に手を出すようなことをすれば……殲滅すればいい」

秋の眩きは風に乗って人混みの中に消えていった。

「残る候補は……冬木教会と冬木中央公園、柳洞寺、アインツベルンの森かな？」

近場の冬木教会から探してみようか」

秋は冬木教会に向かつて歩いていく。秋は人混みを避けるように移動していく。やがて屋根に十字架が付けられている建物が見えてきた。

「ここに来るのも久しぶりだね……」

秋は一度だけ冬木教会に来たことがある。聖杯戦争が始まって間もない頃、士郎と士郎のサーヴァント・セイバー、凜、そしてルーラーと共に聖杯戦争のルールを聞くために来た。

「……………それで？何時まで着いてくる気？」

秋は教会の扉の前で歩くのを止める。秋を囲むように二十人の男女が現れた。

「……………蒼崎秋。貴様はお嬢様方に近づきすぎた。ここで死んでもらう」

「お嬢様……ね。やっぱり更識は僕たちとの契約を反故にしたんだ」

「はっ、我ら更識家が傭兵紛いの貴様との契約を守ると思っていたのか？」

二十人の集団はそれぞれ短刀、刀、呪符を構える。

「安心しろ、蒼崎橙子とも会わせてやろう。あの世でな」

「へえ……」

秋は眼を細めて、集団を見る。

「死ねえ!!」

呪符を持っていた魔術師達が一斉に呪符を投げる。秋が居たところを中心に炎や雷で地面が抉れる。

「他愛ない。『傷んだ赤色』^{スカーレット}の弟子とは言つても所詮は子供か。おい、死体を確認しろ」

「「はっ！」」

三人の男は煙の中に消えていく。

「ぎゃっ!？」

「な、何故生きて……!?」

「ぐきゃっ!？」

煙の中から男たちの悲鳴が聞こえてきた。煙が晴れる。岩から削り取ったような巨大な斧剣を持った秋が立っていた。回りには縦に切り裂かれた男。叩き潰され、肉の塊になっている男だった物体。上半身と下半身が分裂している男の死体が転がっている。

「今、先生をあの名前で呼んだな？ 死ぬ、今すぐ死ぬ、一辺の肉片も残らずに死ぬ」

更識の刺客達は二つの間違いを犯していた。一つ、秋のことを子供だと思つて慢心していたこと。二つ、秋の師にして保護者、蒼崎橙子のことを『傷んだ赤色』と呼んだことだ。

「本当は黒鍵だけで始末するつもりだったけど、特別だ。ギリシヤの大英雄が使つた斧剣で殺してあげるよ」

「虚仮威しに決まってる!!殺れ!!」

刺客達は一斉に秋に襲いかかる。

「—————起動せよ、ブリスト・アインス身体強化・I」

魔術回路が唸りをあげる。秋は斧剣の柄を握りしめ、振るう。それだけで暴風が巻き起こり、更識の刺客達の命を奪う。

「ひ、怯むな!!数は此方の方が上だ!!数で潰せ!!」

刺客達は秋から距離をとって攻撃する。だが、秋にとっては刺客達がいる場所は攻撃範囲内。秋は斧剣を地面に突き立て、盾のようにする。

「—————マテリアルブリスト・フロンツ物質強化・V」

斧剣に魔力が通る。秋は斧剣を押し、刺客達の攻撃を防ぎながら突進する。

「ぜらあつ!!」

斧剣を横に一閃。呪符を構えていた刺客達は体を上下に切断される。

「ば、馬鹿な……我々は更識の精鋭だぞ?それが……それが傭兵紛いの魔術使いに押されていると言うのか—————!!」

リーダー格の男は一步、後ろに下がる。生物としての本能が警鐘を鳴らしている。だが、逃げようとしな。魔術師としてのプライドがそれを許さない。

「残るは貴方だけだよ」

「ひっ……！！」

更識の刺客は男を除いて全員死んでいた。秋の顔には返り血が付いている。辺りは血の池地獄、屍山血河と言つても良いほど荒れていた。男は尻餅をつき、後ずさつて行く。

「た、頼む!? 殺さないでくれ!! 見逃してくれ!! お、俺は刀夜様に命じられただけなんだ!!」

男は秋の足に縋り付いて、命乞いをする。

「……………」

秋はその男のことを冷めた瞳で見つめている。斧剣の柄頭の上に黄金の波紋が現れ、斧剣を波紋の中に戻す。

(な、何なんだあの波紋は……!!? 何でこんな奴があんな魔術を使っているんだ!?)
秋の前に現れた波紋に驚愕しながらも、男は懐から小太刀を秋に見えないように取り出す。

(だ、だが、此処でコイツを殺せば俺の更識内の地位は磐石なものになる!)

「……………助ける訳ないだろ? 先生をあの名前で呼んだんだから」

シユパツ! と音が響いた。両手首が宙を舞い、血が噴き出す。

「あつ……………ぎやあああああああああああああああああ……!! 手、手が、俺の

!!!!!?

手がああああああああああああ!!!?」

男は血が溢れ出ている両手首を抱え込む。秋の手には血が滴る黒鍵が握られている。秋の背後に黄金の波紋が現れ、波紋から旅行鞆が出てきた。秋は旅行鞆に近づき、鍵を開ける。

「この匣はね、何年か前の誕生日に先生がくれたんだ。僕にとって『彼女』がくれた旗と同じぐらい大切な物なんだ」

秋は慈しむような瞳で匣を見つめながら、撫でている。

「……………さあ、久しぶりの餌の時間だ。そこらに残ってる死体も、目の前の男も好きだけ食べると良い」

秋は匣を倒し、蓋に手をかける。

「物質強化・Ⅷ。貪り喰え、憎悪に蠢く魔の棘!」
マテリアルブースト・アハト
ヘイトレド・ウエゴース・デビル・イービル

……………死の門が開かれた。匣から勢いよく棘のような触手に無数の口が付いた『魔』が現れる。『魔』は触手を伸ばし、死体を貪り、最後に踞っている男を頭から丸呑みにして、匣の中に戻っていった。

「……………さて、教会の中を探そうか」

秋は何事も無かったように教会に入っていった。後に残されたのは刺客達が流した血だけだった。

靈脈捜査

II

「埃臭つ………聖堂教会から誰も派遣されてないんだ」

教会の中は何年の人の手が加えられていないからか、埃が積もり、荒れ果てている。

「ん………?」

秋の足跡以外に成人男性程の足跡と何かを引き摺ったような跡が入り口から延びていることに秋は気づいた。

「真新しい足跡………誰か礼拝にでも来たのか?」

足跡は入り口から祭壇横の扉にまで延びている。秋は無言で黒鍵を取り出し、扉まで歩いていく。

「………」

扉をゆつくりと開き、部屋の中を覗きこむ。部屋の中には地下へと続く階段があった。秋は部屋に入り、階段を降りていく。辺りに靴の足音だけが響く。

「これは………」

階段を降りた先には中世の拷問でもしたのか部屋中に血が飛び散っている。所々に肉片も落ちている。

「黒魔術でもしたのかな？一人二人の出血量じゃないね」
ウイッチクラフト

「黒魔術とは生贄を捧げること、呪殺に悪魔召喚、災厄の招来を行う魔術だ。黒魔術ウイッチクラフトの特性上、生贄を躊躇いなく解体する精神と解体による快楽を抑える理性を必要とする為、今では衰退しかけている魔術だ。」

「靈脈の異常は靈脈の真上で黒魔術をしようとした弊害によるもの……いや、それだと解決しない」
ウイッチクラフト

秋は部屋に中央に血で書かれている魔方陣に近寄る。

「黒魔術をした魔術師は一体……」
ウイッチクラフト

「……一体何を呼び出そうとしたのか？ですか」

「……っ!!」

秋はとっさに背後に向かって黒鍵を投擲する。

「おっと、危ない。無駄ですよ無駄。私は影。君の攻撃は届きませんよ」

部屋中に男の声が反響する。秋は新しい黒鍵をいつでも投擲できるように構える。
ウイッチクラフト

「黒魔術をした魔術師だな？態々こんな極東の地方都市で何を企んでるんだい？」

「企み？いえいえ、私は魔術師として当然の目的、根源への到達の為にこの地に来たんですよ」

影は不気味に揺らめく。秋を嘲笑うかのように。

強化の魔術を使い、キメラの腹部を殴る。キメラの腹部からグキヤツと言う音が鳴り、部屋の壁に叩き付けられる。秋は両手に二本つつ黒鍵を持ち、部屋の四隅に向かって投擲する。黒鍵は淡い光を放っている。

「グキヤ、グキヤアアアアアア!!」

キメラは腐敗した足を引っ張りながら秋に迫る。

「……………ごめんね、僕には君を助ける術は持っていないだ」

秋の腰から吊るされている『夜天の書』が開き、頁が捲られていく。秋の手には黄金の馬上槍が握られていた。

「グキヤ、グキヤ、キシヤアアアアアアアア!!!」

「ふっ……!!」

キメラの降り下ろされた爪を馬上槍ランスで弾き上げ、馬上槍ランスを回転させ、矛先がキメラの足に触れる。

「……………トランプ・オブ・アルガリア触れれば転倒!!」

……………キメラが転ぶ。秋は馬上槍ランスを地面に突き立て、新しい黒鍵を取り出し、キメラの両手に突き刺す。

「……………次の人生は、平和に暮らせることを祈ってるよ」

秋は息を深く吸う。

「……………主の恵みは深く、慈しみは永久とこしえが絶えず。

……………あなたは人なき荒野に住まい、生きるべき場所に至る道も知らずに。

……………餓え、渇き、魂は衰えていく。

……………彼かの名を口にし、救われよ。生きるべき場所へと導く者の名を。

……………渇いた魂を満ち足らし、餓えた魂を良き物で満たす」

秋は言葉を紡ぐ。理不尽に、不条理に命を奪われた者の為に。『彼女』が教えてくれた言葉を。

「……………深い闇の中、苦しみと鉄くろがねに縛られし者に救いあれ。

……………今、枷を壊し、深い闇から救い出される。

……………罪に汚れた行いを病み、不義に悩む者には救いあれ。

……………正しき者には喜びの歌を、不義の者には沈黙を」

最初は暴れていたキメラは大人しくなり、今は僅かに痙攣けいれんをしている。

「……………去りゆく魂バクス・エクセウンティブスに安らぎあれ」

洗礼詠唱。地上に縛り付けられた魂は解放され、キメラは動かなくなつた。動かなくなる前にキメラの口が微かに動いていた。何を言っていたのか、それは秋にまで届かなかつた。

「……………お休み」

秋は黒鍵を回収する。そして、斧劍の柄を黄金の波紋から引き抜く。

「ブリスト・ズイーベン マテリアルブリスト・ノイン
身体強化・VII。物質強化・IX」

秋は自身の体と斧劍を強化する。そして、斧劍を地面に叩き付ける。斧劍は魔方阵を破壊し、二メートル程の深さの穴を開ける。秋はキメラの死体を引つ張り穴に落とす。

「はあ………はあ………流石にズイムン VIIはやり過ぎたかな？」

秋は壁に寄り掛かりながら座り込む。

「先生に怒られるね………これは」

秋の右腕と両足から血が流れている。秋は服を破り、手早く止血していく。

「………でも、幾つか収穫はあった」

更識の裏切りと外来の魔術師との結託、ウイッチクラフト黒魔術による根源への到達、これから起こりうる出来事、それらを頭の中で纏めていく。

「よし………」

血が止まったことを確認した秋は立ち上がり、四隅の黒鍵と斧劍を回収する。

「………ごめんね」

秋は階段の前で立ち止まり、もう一度穴の方を向いて謝罪の言葉を残した。それは、生贄にされた人に対するものなのか、それは秋にも分からなかった。

「ただいま戻りました……」

「あ、おかえり秋って、その怪我どうしたの!？」

伽藍の堂で始めに秋を迎えたのは春華だった。春華は秋の怪我を見て慌てて駆け寄る。

「春華。先生は?」

「蒼崎さんより秋の怪我の方が大切だよ!？ちよつと待ってて!すぐに救急箱持ってくるから!」

春華は慌てて自室に入っていく。

「戻ってきてたのか……おい、その怪我はどうした?」

「ちよつとミスりまして……それより幾つか収穫がありました」

「話は後で聞く。それより手当てが先だ。こっちに來い」

「えつ、あ、ちよつ!?!」

橙子は秋を引つ張り、ソファーに座らせる。橙子は手慣れた手付きで秋の服を脱がしていく。

「うわああああああああああああ!!いきなり何するんですか、先生!?!」

「服を着てたら怪我の具合が分からないだろ。ほら、大人しくしてろ」

秋は抵抗を試みるが、無駄に終わる。橙子は秋の怪我を診察して、右腕の怪我を見て手を止める。

「……………おい、何段階まで強化した?」

「えつと……………ズイベン VIIまでイタツ!?!」

橙子は無言で秋の肩の怪我を握る。

「イタタタタタタタタツ!!!ご、ごめんなさい先生!?!だ、だから、肩の怪我に触るの止めてください!!!」

「まったく……………このバカ弟子が! 最高でもVフユンフまでしか使うなど言っただろ!?! 死に急ぎすぎだ、バカ! 肉が割けてるじゃないか!」

秋と橙子のじゃれあいには春華が戻ってくるまで続いた。

霊脈捜査

III

「それで?どんな収穫があったんだ?」

秋と橙子のじゃれあいには春華の介入によって終了した。今は橙子が癒しのルーンを使い、秋の傷口を塞ぎ、その上から春華が包帯を巻いている。

「二つ目が更識の裏切りですね。冬木教会で更識の刺客達に教われました」

「ほお……意外に早かったな。もう少し契約関係が続くと思っていたが?」

橙子は意外そうに言いながらも、何処か更識が裏切ることを予見していたようだ。

「それに、どうも冬木に潜伏している外来の魔術師と結託している節もありますね。結託している魔術師は黒魔術ウツチクラフトの使い手でした」

「もう、接触したのか。ソイツの目的は?」

「……………黒魔術ウツチクラフトによる根源の渦への到達」

「……………なに?黒魔術だど?」

橙子は煙草を吸う手を止め、秋の方を見る。

「はい。冬木教会の地下室で魔術師の影とは遭遇したんですが、詳しいことまでは聞き出せませんでした」

「いや、それだけ聞き出せれば十分だろう。しかし……黒魔術か」
ウイッチクラフト

「橙子は何かを考えるかのように顎に手を当てる。」

「ねえ、秋。黒魔術ってなに？」
ウイッチクラフト

「……黒魔術って言うのは生贄を使って行使する魔術体系の一つだよ。生贄は生きてるモノなら何でも良い。動物でも、それこそ人間でも」

「秋が思い出したのは生贄され、挙げ句の果てにキメラにされた人たち。秋も魔術師の端くれ、黒魔術も理解している。それでも、成熟しきっていない秋の精神には五人も生贄して行使する黒魔術には嫌悪感を抱いている。」

「秋。生贄は何だった？猫か？犬か？」

「……人間でした。数は五人。死体は繋ぎ合わせられてキメラにされていました」

「五人……それほどの人間を生贄して根源への到達だと？馬鹿馬鹿しい」

「春華は秋と橙子の話の聞いて気分を悪くしたのかトイレに駆け込んで行った。」

「先生。黒魔術で根源への到達は出来るんですか？」
ウイッチクラフト

「分かん。そもそも、黒魔術は私の専門外だ」
ウイッチクラフト

「橙子は秋の質問を分らないと一蹴して煙草を吸う。」

「……少し昔の話をしてやろう。ある魔術師がいた。その魔術師も根源を目指していた。『人がどう生きたか』では無く、『人がどう死んだか』を克明にして記録しよう

とした。その結果、あるマンションを心象風景、人工的な固有結界にしたてあげた」

橙子は秋を引き取る前のことを思い出しながら語る。ある男の結末と—————
目指した場所を。

「そのマンションでは崩壊寸前の家族を集め、家庭崩壊を後押しして全員が死ぬように仕向けた。そして、六四通りの死に方を人形に再現させ続けた」

螺旋のように繰り返される死。朝に生き、夜に死ぬ人形たち。

「その魔術師は式を狙っていた。何故だか分かるか？」

「……………直死の魔眼ですか？」

秋は顎に手を当てながら、式に関することから思い付くものを一つだけ言った。

「正解だ。式の体は根源—————」 『と繋がっている。その魔術師はあろうことか自分の脳髓を式の体に移そうとしたんだ」

「……………その魔術師は女性になりたかったんですか？」

「あはははははっ!!確かにそうとも取れるな!」

橙子は喉を鳴らしながら笑う。愛弟子の思わぬ返しに大声で笑う。

「それだつたらどれだけ面白いか……………ごほんっ。式の体は『』と繋がっているからな、自分の脳髓を式の体に移して根源の渦に至ろうとしたんだ」 『と繋がって

「式さんが生きてるってことは……………その魔術師は死んだんですね？」

「ああ、死んだよ」

最後に学友と交わした問答。それは橙子の脳裏に今も鮮明に焼き付いている。

——荒耶。何を求める。

——真の……叡智を。

——荒耶。何処に求める。

——ただ、己の内にのみ。

——荒耶。何処を目指す。

——知れたこと。この、矛盾した……螺旋^{セカイ}の果てを。

灰を灰皿に落とす。

「秋。お前には知っておいてほしい。根源を目指す魔術師は我欲に走る魔術師もいるが、何かを残そうとして根源を目指す魔術師もいる」

橙子は暗に偏見を持つなど言う。学友が我欲の為に五人も生贄して根源を目指す魔術師と一緒にされないために。

「そう……ですね。いきなり変えるのは無理かも知れないですけど、頑張ってます」

「ああ、ゆつくりで良い。その時はお前がどんな答えに至ったのか、私に教えてくれ」

橙子は微かに微笑みながら言う。秋も微かに笑う。それは『師と弟子』ではなく、『母

親と息子』のような雰囲気の流れている。

「秋。今日は休め。後処理は私がしておく」

「えっ、でも、黒魔術ウイッチクラフトを使う魔術師を捕まえないと」

「すぐには動かんさ。影でお前の前に現れたつてことはその魔術師はよっぽど用心深い。お前はその魔術師が動き出すまでに傷を癒しておけ」

橙子は椅子から立ち上がって、コートを羽織る。

「秋。お前にやった匣、少しのあいだ貸してくれないか？」

「良いですけど………何処に行くんですか？」

秋は黄金の波紋から匣を取り出して橙子に渡す。

「なに、私の可愛い息子愛弟子を襲った不逞な輩を問い詰めて行くだけだよ」

橙子は口元を大きく歪めながら部屋から出ていった。

「あの笑い方は………先生、本気で切れてる」

秋は冷や汗を流しながら橙子が出ていった扉を見続けた。

「……………」

橙子は一つの屋敷の前で車を停めた。門の表札には『更識』と書かれている。橙子は匣を持って車から降りる。

「……………蒼崎さん？」

「ん……………？あら、簪ちゃんじゃない」

今の橙子は眼鏡をかけている。秋と話すときは基本的に眼鏡を外している。

「どうしたんですか、こんな時間に？」

「ちよつと、貴女のお姉さんにお話があつてね。会えるかしら？」

「えつと……………はい、今の時間なら大丈夫だと思います」

簪は腕時計で時間を確認すると、門を開いた。

「お姉ちゃん部の部屋まで案内します」

「ありがとう、簪ちゃん」

橙子は簪に続いて歩く。

(監視されてるわね……………それも露骨に)

橙子は門を通ると同時に視線を感じていた。使い魔越しではなく肉眼による監視だ。

(遮蔽物が多いわね。何処にいるかまでは確認できない……………か)

橙子は顔を動かさずに視線だけを動かして辺りを見る。屋敷は純和風の建築物だ。

(この子の感じからして、魔術師が入り込んでいることも、秋を襲ったことも知らないよ

うね)

橙子は簪の背を見ながら内心で呟く。橙子は更識姉妹には少なからず感謝している。同年代の魔術師が居るということが秋に良い影響を与えたのか、姉妹と会わせてからよりいつそう秋の魔術師としてのレベルが上がっていった。

「ここがお姉ちゃんの部屋です。お姉ちゃん、入るね」

簪は主の許可が返ってくる前に襖を開けた。

「どーしたの簪ちゃん。もしかして、お姉ちゃんが恋しくなったの?」

部屋の主はベッドに横になって足をぶらぶらと動かしている。風呂上がりなのか、水色の髪が湿っている。

「もう……お客さんが来てるんだよ。しっかりして」

「んう、お客さ……んっ!」

部屋の主は頭を持ち上げて橙子を認識すると固まった。

「や、久しぶりね。君が当主に就任して以来かしら?」

「お、お久しぶり……です、橙子さん」

部屋の主……更識楯無は冷や汗を流しながら起き上がった。

「ど、どういった御用件でしょう?」

「ちよっと君に確認したいことがあるのよ。良いかしら?」

「は、はいー」

楯無は居住いを正す。橙子は部屋に入り、襖を閉める。簪は楯無の隣に座る。

「さてー……秋の契約者、更識楯無。お前は今、この街に魔術師が入り込んでいることに気がついてるか？」

橙子は眼鏡を外す。高圧的に、無機質に、無感情に問う。

「魔術師……？いえ、そんな事は私は聞いていません。簪ちゃんは聞いてる？」
「うん。今初めて聞いた」

「その魔術師はこの冬木で根源に至ろうとしている。黒魔術ウィッチクラフトで五人もの人間が犠牲になっっている」

「五人!? 簪ちゃん! 今すぐ虚ちゃんに確認してきて!!」

「うんー」

簪は部屋から走って出ていった。

「そして、ここからが本題だ。更識楯無……お前は屋敷の人間に秋を殺すように命じたか？」

「……」

楯無は橙子の言葉に絶句した。秋を殺すように命じた? 誰が? 私か? 楯無の頭の中を疑問が埋め尽くしていく。

「わ、私はそんなことを命じてなんかいません!! 確かに更識家内部は一枚岩とは言えませんが! でも! 秋君を暗殺するような事は絶対にしません!!」

「そう慌てるな。何もお前を疑っているとは言っていない。一応の確認をただけだ。アイツ^秋の命を狙ったのは別にいる。そうだろー! 更識刀夜」

橙子はコートのポケットから何かを掴み、襖に向かって投げる。橙子が投げたのは形は変哲もない小石だった。小石が襖に届くのと同時に、襖が開いた。小石は光だしー! 爆発した。襖を開いた更識の刺客達は爆発の衝撃で庭に吹っ飛んだ。

「ちっ! 気づいていたか」

「あんな下手くそな監視に気づかないほど、私は日寄ってはいない。それより、その反応からして秋の命を狙ったのはお前のようだな」

「ああ、そうだ。本来ならあの餓鬼の首とお前の体を魔術協会に引き渡そうと思ったが! 暗殺に出した奴らが戻って来ないところを見ると、お前の弟子に殺られたようだ」

楯無と簪と同じ水色の髪に黒目の浴衣姿の男が立っていた。現・更識楯無の父親にして前・更識楯無、更識刀夜が部下を引き連れていた。

靈脈捜査

IV

「何を餌にされて黒魔術ウイッチクラフト使いと結託した？金か？名誉か？私と秋を差し出して階位でも得るつもりだったか？」

「ふん、そんなモノに興味はない。私とあの魔術師とはお互いに不可侵を約束しただけだ。我更識らは冬木にある靈脈の場所を教える。黒魔術あ使いは更識我に害を加えない。そんな単純な約束だ」

更識刀夜はつまらなさそうに鼻を鳴らす。

「隠居した大人がしやしやり出てくるものじゃないぞ。大人しく山小屋にでも籠っていたら良いものを」

「現当主が頼りにならないと言われては、私もおちおちしていられないのでな。何代も積み重ねて来た更識を、更識家始まって以来の無能な当主のせいで潰されるのは我慢でさんのだよ」

「……………えっ？」

刀夜は吐き捨てるように言う。楯無は自身に魔術師としての才能が無いことは分かっていた。それでも、父から言われた言葉は衝撃的だった。

「ああ、理解わかるとも。私だつて魔術師だ。だけどさあ……その話は一体、私に何の意味があるんだい？」

橙子は前髪をかき上げて、口元を大きく歪める。

「私が今日、此処に来たのはただの報復だ。私の息子愛弟子を殺そうとしたお前たちへのなあ！」

「っ！殺れ!!」

橙子が手に持っていた匣を地面に落とすのと同時に、更識の刺客達が楯無ぶだ諸とも殺そうと呪符を投げる。――匣が開く。棘の壁が呪符を防いだ。壁だった棘は触手になり更識の刺客達を襲う。

「な、何で効いてなきや!!」

「いやああああ!!!!?」

「し、死にたくないいいいいいい!!!!?」

――阿鼻叫喚。ただ、それだけだった。ある者は頭から丸呑みにされる。ある者は心臓を抉り食べられる。ある者は爪先からゆつくりと食べられていく。この屋敷にいたであろう全ての刺客達は『魔』の餌食になっていく。それは、更識刀夜にも当てはまる。更識刀夜は触手に絞め上げられ、左手と右足を喰われている。

「更識刀夜。死ぬ前に一つ聞かせろ。娘の事を道具としか見ていなかったお前が、何故、

娘を守るような依頼を秋にした」

「………がふっ！母胎に何かあれば………ごふっ！更識の繁栄に影響が出るからだ」

「そうか………聞いて損したよ」

刀夜は匣の中に引つ張りこまれていった。パタンツ。静かに匣の蓋が閉まった。

「さて………問題は」

橙子は後ろに振り向く。そこには眼に光が灯っておらず、精神崩壊一歩手前な状態の楯無が座り込んでいただ。

（無理もないか………いくら更識の当主とは言え子供。それも、自身の出生と必要が無いことを一氣に知らされたんだ。下手したら自殺するかもな）

橙子は懐から箱を取り出し、煙草を一本くわえるて火を灯す。紫煙が風に乗って夜空に流されていく。

—————

「あの………今日からよろしくお願いします」

「よろしくなのだ〜♪」

「本音！ちゃんと挨拶しなさい！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

深夜。伽藍の堂四階に明かりがついている。秋は寝ている所を橙子に叩き起こされた。

「・・・・・・・・先生。どういうことですか？」

「引き取った。以上」

「先生、起承転結の内の起承転をすつ飛ばして結だけ言うのは止めてください。更識家に行つて何で更識先輩達を引き取ることになるんですか」

ソファアーには更識姉妹と布仏姉妹の四人が座っている。橙子は橙子で素知らぬ顔をして煙草を吸っている。

「はあ・・・・・・・・四人とも今日はもう寝て。隣の部屋にベッドあるから。左側は人がいるから右側で寝て」

「分かったのだから」

「もう・・・・・・・・」

布仏姉妹が先に部屋に入っていく。

「ごめんね、秋。お姉ちゃん行く」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

簪は楯無の手を引いて部屋に入つていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

秋は無言で入つていく楯無を見て、違和感を覚えた。

「先生・・・・・・・・更識先輩に何をしたんですか？」

「私は何もしていない。そうだな・・・・・・・・例えるなら一時期のお前より酷い状態だ」

「・・・・・・・・精神的支柱を無くしたんですね」

「ああ。お前は無意識に私をジャンヌ・ダルクの代わりにしているだろう？」

「ええ・・・・・・・・まあ」

秋はバツが悪そうに顔を逸らす。

「今の楯無は精神的支柱、言い方を変えれば依存するモノが無い状態だ。人間は何かに依存しないと生きていけない生物だ。金、女、薬、それこそ宗教にいたるまで人間は依存する。何故か分かるか？」

「・・・・・・・・自分に足りない何かを補うためですか？」

「半分はな。もう半分は自分が優越感に浸りたいからだ。金は多く持つほど他人との貧富の差で優越感を得る。女は同性よりさらに綺麗に、美しくなって『自分は他の女より美しい』と思うことで優越感に浸れる」

橙子は吸い殻を灰皿に押し付けて火を消す。

「薬は辛い現実からの逃避のために使って依存していく。宗教も結局の所は自分の行いを正当化して優越感に浸りたいだけだ。魔女狩り然り、十字軍の遠征然りだ」

秋は『魔女狩り』という言葉に反応して、歯をくいしばる。

「今の楯無はその依存先を失っている状態だ。ここからは二つの結末が待っている。一つ、新しい依存先を見つけて立ち直ること。二つ、このまま依存先を見失った果ての自殺。このままだと後者の方が確率的に高いな」

「そう……ですか」

秋は外は努めて冷静に、内心は楯無の未来に興味はない。秋もまた、ある種の破綻者なのかも知れない。

「私はもう寝る。お前は どうする?」

「僕も寝ますよ。流石にこの時間まで起きてたのは辛いんで」

時計の針は午前三時を指している。

「ちよつと待つてろ。毛布取ってくる」

橙子は部屋から出ていった。

「……………すう」

橙子が出ていくと暫くして部屋に秋の寝息だけが響く。

「持ってきたぞ」

三階から二人ぶんの毛布を持ってきた橙子は寝息を立てている秋を見つけた。

「……………」

橙子は座っている状態で寝ている秋を横にして、毛布をかける。橙子は秋の頭を持ち上げ、自身の膝の上に乗せて髪を撫でる。ふと、式に言われた言葉が脳裏に浮かんだ。

『トウコさ、アイツ引き取ってから変わったよな』

ある夏の日に言われたのはそんな言葉だった。

「ふっ……………私が変わった……………か」

橙子は小さく呟き、眠りについた。

霊脈捜査

V

「ねえ、秋。この人たち……誰？」

「えつと……知り合い？」

朝から秋は春華に詰問されている。朝起きて隣ののベッドに知らない女が四人もいればこの部屋唯一の男の秋を疑うのは当然だ。

「それに……どうして秋のベッドで寝てたの!? 私も寝たことがないのに!!」

春華が一番怒っているのは自分が寝たことがないのに何処の女とも分からない四人が秋のベッドで寝ていたことが一番気に入らない。

「流石に年頃の女の子をソファで寝かせる訳にはいかないだろ? それに数が足りないし」

「うう〜!! そういう意味じゃないの!!」

春華は自分の言いたいことが伝わらないことに若干イライラする。

「良い!? 同じ歳の男の子が使ってるベッドに女の子を寝かすなんて、飢えた狼の群れに羊を放り込むような愚行だよ!! 私なら間違いない秋のベッドを滅茶苦茶にする自信があるよ!」

「僕は君のその発言にドン引きだよ……」

そもそも、秋は楯無達の事を異性として認識していない。秋にとつての異性は後にも先にもジャンヌ・ダルクただ一人。

「朝から喧しい。春華、お前は今日は学校だろ？遅刻する前に行け」

「えっ？あ、本当だ!?!秋！帰ってからじつくりと話を聞かせてもらおうからね!」

春華は食パンをくわえ、慌ただしく部屋から出ていった。

「はあ……朝から喧しい奴だな、お前の姉は」

「ええ……昔からあんな感じですよ。喧しくて、無神経で、人の領域に土足で踏み込んで来るくせに誰にでも分け隔てなく接するんですから、たいした人間ですよ。春華は」

橙子はため息を吐いているが何処かからかうような瞳で秋を見る。秋も秋で呆れたような顔をしながら口元は少しだけ笑っている。

「それで？今日はどうするんだ？お前も学校に行くか？それとも黒魔術使いを捜すのか？」

「そうですね……いくつか霊脈が通つてる場所に仕掛けをしてきます。そのあとは……そうですね。夜まで散歩してきますよ」

秋は今日の予定を橙子に伝えてから自室に入つていった。

「……秋は行ったな。これからの君たちの話をしましょうか」

秋が出掛けたのを確認した橙子は眼鏡をかけて、話を始めた。

「更識家を実質的に潰してしまつた手前、君たちを放置するのは気分が悪いのよね。出来る限りの援助はしようと思うけど……何かしてほしいことはあるかしら？」

「……私と本音は布仏の分家筋から前々から誘いがあつたので其方に世話になろうと思っています。ただ、お嬢様を一人にする訳には……」

布仏虚は対面に座っている楯無を見る。楯無はまだに瞳に光はない。『まるで人形のようなだ』、虚は主にたいして無礼であると思ひながらも、そう思わずにはいられなかつた。

「……虚さん。私とお姉ちゃんは大丈夫だから、分家筋の方に行ってください」

簪はそう言うが、誰の目から見ても無理をしているのが分かる。

「私は嫌だよ！かんちゃんとお別れなんてしたくないよおっ!!」

「本音……我が儘言わないで。一生会えない訳じゃないんだから」

虚の妹、布仏本音は泣きながら簪と別れることを拒否するが、簪が宥める。

「……虚ちゃんたちは本当にそれで後悔しないのね？」

「はい。ですからどうか、お嬢様と簪様を此処に住まわせてあげてください」

虚は立ち上がり、橙子に向かつて頭を下げる。虚とて橙子に思うところが無いわけではない。橙子の報復のおり、匣の中の『魔』に両親を殺されている。だが、虚は両親とは折り合いが悪く、その事を心配していた分家筋からの誘いに乗ることにしただけだ。心残りがあるとすれば、いまだ立ち直れない主だけだ。

「わかつたわ。でも、君たち二人を養えるほどの会社にはお金は無いわ。だから、働いてもらうわよ。それでも良い？」

事実、『伽藍の堂』は年中経営難だ。橙子の建築物のデザイン料に秋の依頼料等で賄われている。そこから黒桐幹也への給料、秋の学費、三人の食費、橙子が注文した骨董品等で一気に吹き飛ぶ。

「あの……本当に良いんですか？ 私たちを此処に住まわせても蒼崎さんには何の得にもならないのに」

「良いの良いの。君たち二人には秋がお世話になつてるしね。それに、更識を潰したのは私だし二人を放置して路頭に迷わせる訳に行かないじゃない」

橙子は煙草に火を灯す。実際は心配してが四割、打算が六割だ。橙子は簪の『近未来視の魔眼』を手元に置いておくためだ。とある事件の加害者にして被害者の少女と同

じ、先天的な魔眼持ち。橙子にとってこれほど興味をそそのくのは秋を拾って以来の出来事だ。

「なら……すいません。お世話になります、蒼崎さん。お姉ちゃんの方も私が働きますから、今は休ませてあげてください」

「ええ、今の彼女を働かすほど私も鬼じゃないわ。近いうちにカウンセリングしていくからそのつもりでいてちょうだい」

橙子は煙を吐き出し、窓から見える高層建築物群が建ち並んでいる風景を見る。

（今日には嵐が来るかしら……頑張りなさいよ、秋）

「……此処にもある」

秋はアインツベルンの森にいる。かつての聖杯戦争に参加していた最強のマスターと不撓不屈の大英雄が拠点にしていた城と森。そこには冬木教会の地下で見つけた魔方陣が書かれている。

「……でも儀式をしたのか……」

秋は魔方陣に触れる。橙子から黒魔術ウィッチクラフトのことは教わっている。それでも複数の場所

に魔方陣を刻むようなことは聞いたことがない。

「下手に細工したらバレるね．．．．．」

秋は袖口から黒鍵四本を取り出して、魔方陣の四方を囲うように刺す。黒鍵の刃には『土地』のルーンと『財産』のルーンが刻まれている。『土地』のルーンによつて魔方陣の回りを外界から隔絶し、『財産』のルーンによつて、魔方陣が書かれている土地を秋の財産だと一時的に世界に誤認させる。こうすることで霊脈から流れてくる魔力を遮断した。

「あとは上手く起動するか．．．．．だね」

秋はしばらく魔方陣を見つめてから、アインツベルンの森を後にした。森を抜け、人混みに紛れ、ビル街の隙間を抜けていく。そして————秋の足は一つの住宅の前で足を止めた。

「．．．．．」

普通の住宅、在り来たりで、一般のサラリーマンがローンを組んで買うような家だ。その表札には『織斑』と書いている。

「馬鹿らしい．．．．．」

秋にとつて、織斑家には未練はない。そもそも、此処に来たのはただの偶然。秋は住宅の前を通り過ぎていった。

夜。ネオン煌めく繁華街を秋は歩いている。路地裏から聞こえる不良の笑い声、客引きの声、車が走り去る音、その全てに関心無く繁華街を歩く。

「収穫なし……か。大まかな靈脈が通っている場所には黒鍵を刺しておいたけど、どれだけ効果があるか」

繁華街を抜け、自身の家とも言える建物『伽藍の堂』に帰るために歩いている。辺りの工場は仕事が終わったからか明かりが消え、まるでゴーストタウンのように人気がない。

『……………まさか、生きているとは思いませんでしたよ』

……………工場地帯に男の声が反響する。

「そういうお前こそ、まだこの町に居たんだ」

『ええ、いますとも。私の目的は根源への到達。そう易々と帰る訳にはいきませんからねえ』

秋の前に人形の影が表れる。

『生き残った貴方には私が根源に到達するところを見学する権利をあげましょう。この

町を守りたいんでしょう？ 生きたいんでしょう？ 私を止めたいんでしょう？ 午前零時、この町で一番高い山でお待ちしておりますよ、極東の魔術師』

影はその言葉だけを残し、霧散した。秋は何事も無かったかのように歩き出す。伽藍の堂の階段を登り、事務所に入る。

「帰ってきたか。何か収穫はあったか？」

事務所には普段通りの橙子が煙草を吸っていた。その姿に秋は何故か安心した。

「今さつき宣戦布告されましたよ。自分を止めたかつたら円蔵山にまで来い、らしいです」

「ほお、用心深くせに挑発と来たか。もちろん行くんだろ、秋？」

「ええ、今は相手の思惑に乗ってやりますよ。黒魔術ウィッチクラフトでどうやって根源に至るのか興味

もありますし」

秋は着ていたコートを脱ぎ、椅子にかける。

「………四人はどうしてます？」

「隣の部屋だ。今ごろ春華も含めてガールズトークでもしてるんじゃないか？」

「そうですねか………コーヒーでも飲みます？」

「ああ、貰おう」

秋はコーヒーメーカーに豆を入れ、スイッチを押す。コーヒーメーカーが豆を焙煎す

る音だけが事務所に響く。焙煎が終わり、カップにコーヒーを注いでいく。

「はい、出来ました。幹也さんみたいに上手に出来てないと思いますけど」

「インスタントを淹れるのに上手い下手は無いだろ」

橙子は秋からカップを受け取り、一口飲む。

「……まあまあだな」

「あはは、そうですか」

橙子の評価に秋は気にした風もなくコーヒーを飲む。

「……まあまあですね」

「だろ?」

自分で淹れておきながら橙子と同じ評価だった。

「少し待ってろ。何か作ってやる」

橙子はパイプイスから立ち上がり、もはや春華の領域となっているキッチンに入っていった。

「先生の手料理……」

秋はイスに座り、コーヒーを飲みながら橙子の手料理を楽しみにしていた。この先にある、黒魔術使いとの戦いを見据えながら。

靈脈捜査

VI

午後十一時。四階の事務所の明かりが工場地帯を僅かに照らしている。秋はイスにかけていたコートを羽織る。

「……………行くのか？」

「はい。手早く片付けてきますよ」

橙子は煙草を吸いながら本を読んでいる。秋は戦いに向けて最後の装備の確認をしている。黒鍵五十本、魔術礼装・夜天の書、そして、『彼女』が残した聖骸布のみだ。

「それじゃあ、行つてきます」

「ああ、行つてこい。……………気をつけてな」

「……………はい」

特に会話することなく、秋は事務所から出ていった。カツンツ、カツンツと鉄の階段を下りる足音が工場地帯に響く。昼間散歩したときと同じように、繁華街を抜けるために歩いていく。夜も遅いからか、繁華街のシャツターは閉まり、開いているのは居酒屋や風俗といった夜が営業時間な店だけだ。繁華街を抜け、冬木大橋を抜け、住宅街に入った。明かりは疎らに点いている。そして……………目的の場所についた。

「.....」

円蔵山。かつての聖杯戦争の終局の地。この冬木市一帯の靈脈の大本に迫る。秋は寺院に続く階段を登っていく。登り始めること十分。山門が見えてきた。

「.....時間ピッタリですね。時間通りに物事が進むのは素晴らしいことですよ。そう思いませんか、極東の魔術師」

境内には黒色のコートに同じ黒のシルクハットを被り、狐眼の男が立っていた。

「同感だね。でも、僕と話をしている内に時間が進んでいくよ?」

「ええ、そうですね。ですが、この時間は貴方のために確保していた時間なのです。お話ししましょう、私が根源に至るための手段を」

「それは楽しみだ。僕は黒魔術ウツクチクラフトでどうやって根源に至るのか興味がある。でも、良いのかい?自分の研究成果を僕にバラして」

「構いませんよ。どうぞ貴方はここで死ぬ。ならば、冥土の土産として、貴方に根源への道を教えてさしあげようと思つた私なりの慈悲ですよ」

狐眼の男は口もとに軽薄な笑みを貼り付け、自慢気に語り出す。

「私は根源をこう考えています。神霊は神秘が衰退するにつれ、神霊はこの世界とは違う高次元に移つたと言われています」

「ああ、そうだね。神霊は神秘と人々の信仰によって存在している。だけど、B.C. 二六

五五、ギルガメツシュ王が神々と人間を別離させた」

「その通りです。そして、私はこう定義付けました。神霊が移ったのは根源ではないかと」

「なに………?!」

「そして、本来の黒魔術は生贄を触媒に悪魔を召喚する魔術。ですが、私は悪魔ではなく神霊を召喚するのです！神霊を召喚した時に開くであろう穴を通り、私は根源に至るのです!!」

「馬鹿な、人間に従う神霊なんているわけない！そもそも、神霊が根源にいるとして、神霊を呼び出すための生贄はどう準備するんだ！」

「………もう、準備できてるじゃないですか。この町の人間全てを生贄にして神霊『テスカトリポカ』を呼び出すのです!!」

「テスカトリポカ………!?!」

テスカトリポカ。南米アステカ神話に登場する主神の石柱。キリスト教では神霊から悪魔に貶められた。同じ神話群のケツアル・コアトルとは宿敵同士だ。

「テスカトリポカには創造神の他に悪魔としての側面が存在しています。黒魔術で召喚できる条件を満たしているのですよ!!」

狐眼の男は狂ったように嗤う。

「グキヤア!!」

左手を斬られたキメラはまた、秋の前から姿を消す。

(スピードが上がった? 無理矢理キメラの性能を上げたのか!?)

秋は自身の周りに黒鍵を四本突き刺す。秋の腰から吊るされている夜天の書が開き、ある頁で止まる。秋は地面に手を当てる。

「宝具起動————串刺城塞!!」

秋を中心に無数の槍が生えていく。その数は二万。圧倒的な物量により動きが速くなっているキメラを捉えた。

「グッ………キヤア」

「キヤシャ………」

串刺にされたキメラはしばらく痙攣して、活動を停止した。

「………これは驚きました。なんですか、今の魔術は? この国特有の魔術ですか?」
「教えるわけないだろ。それよりキメラは全部倒した。もう、お前を護るモノは何もな
い」

「ええ、そのようですね。ですが————こちらの準備も整いました」

男の足下の魔方陣が光だす。

「さあ、アステカの悪魔よ!! 今、この現世に姿を顕し私を真の叡智に導きたまへ!!!!」

「……………死ぬのはお前だよ、三流」

秋は干将で男の右手を切断する。そして、莫耶を男の太股に刺す。

「ぐぎゃ!」

男は太股の痛みで上半身が地面に近づく。……………月明かりに照らされた干将が、男の首を断つ。

「……………地獄で根源でも目指してろ」

首を失った体は倒れ、地面に血が流れていく。

「……………疲れた」

秋は死体に黒鍵を刺して、『氷』のルーンを起動する。男の死体はたちまち凍りつき、粉々に碎け散った。

「はぁ……………」

秋は近くの木に寄り掛かる。そして、ゆっくりと瞼を閉じていった。

境内に秋の寝息だけが響いている。

『オオオオオ……………カラダダ。カラダ……………』

活動を停止した四体のキメラから白い霧が出てくる。霧の正体は現世に縛り付けられた魂。理不尽に殺された人たちの怨念、復讐心が形を得て、一つのゴーストになった。

『カラダ……カラダ……カラダ……』

ゴーストは覚束無い足取りで秋に近づく。

『カラダヲクレ……カラダ……カラダ……!』

ゴーストは秋の首に手をかけようとするが、弾かれた。秋の懐から聖骸布が飛び出てくる。

『……下がりなさい。この世には最早、貴方方の居場所はありません』

布の回りに魔力が集まり、人の形をとる。そして、手に持っている旗を一閃。ゴーストは霧散した。

『……大きくなりましたね、秋。でも、次に会うときはお説教ですよ?』

それは何の奇蹟だろうか。死と不甦した魔術の魔力が充満した境内だからか、それとも霊脈の大本だからか。ただ一度の奇蹟が、限定的な英霊の現界を可能にした。英霊は秋の頭を撫でる。英霊は満足したのか、微笑みながら消えていった。

靈脈捜査

了

「へくちつ……寝てたんだ」

秋は自分のくしやみで起きた。時刻はまだ日が昇る前。境内には男の頭部とキメラの死体だけが残っている。『氷』のルーンを刻んでいる黒鍵をキメラの死体に投擲する。キメラの死体は凍つていき、狐眼の男と同じように砕けて霧散した。

「この頭は……どうしよう？」

秋は残された男の頭部の処理に困っていると、黄金の波紋から棘が伸び、頭を丸呑みにしていった。

「……あの子、あんなことも出来たんだ」

秋は自身の魔術礼装の新たな可能性に戦慄しながらも、境内をあとにした。朝も早いからか住宅街には明かりが点いていない。住宅街を抜け、冬木大橋を抜け、繁華街に入った。繁華街も人は疎らにしか歩いていない。秋は繁華街を抜けて工場地帯に入った。そして、家兼事務所『伽藍の堂』の前についた。鉄製の階段を上り、四階を目指す。「ただいま戻りました」

秋は事務所の扉をゆっくりと閉める。中は電気がついておらず、誰かの寝息だけが聞

こえる。

「先生……?」

秋は橙子に近づき顔を覗き込む。起きていても美人な橙子は眠っていても美人で、まるで絵画のようだ。秋は思ってしまった。テーブルの上に毛布と枕、救急箱、そして書き置きが置いてあることに気づいた。

『バカ弟子へ。いつ帰ってくるか分からないので私は先に寝る。怪我をしているなら適当に処置しておけ。私が起きたら診てやる』

走り書きながらも綺麗な字で書かれていた。秋は傷を消毒し、包帯を巻いていく。

「お休みなさい、先生……」

秋は毛布を被り、二度目の眠りについた。

「んう……あれ?」

秋はゆつくりと瞼を開く。

「おはよう、秋君」

「……おはようございます、幹也さん」

目覚めて最初に視界に映ったのは伽藍の堂唯一の従業員、黒桐幹也だ。幹也は机の前で資料を整理している。

「……………幹也さん。先生は？」

秋は事務所内を見渡して、事務所内に橙子が居ないことに気づいた。

「橙子さんは出掛けてるよ。もうすぐ帰ってくるんじゃないかな？」

「そう……………ですか」

「何か飲むかい？」

「えつと……………お願いします」

「うん、ちよつと待つてね」

幹也はパイプ椅子から立ち上がって、キッチンに入つていった。

「なんだ、もう起きてたのか」

「あ、先生……………」

事務所の扉が開き、橙色のコートを着た橙子が入ってきた。

「黒桐。私もコーヒード」

「わかりましたー」

橙子は自分の席に歩いて行きながらキッチンでインスタントのコーヒーを沸かしている幹也に注文する。幹也も慣れているのか橙子の分のカップを棚から取り出す。

「秋。黒魔術使いはどうした？」

「始末しましたよ。生かしておくメリットも無いですし」

「そうか……」

橙子はパイプ椅子に座り、煙草に火を点けて吸う。

「黒魔術使いはどうやって根源に至るつもりだったかは聞き出したか？」

「向こうが勝手にベラベラと喋ってくれましたよ。……神霊が根源にいますして、ウィッチクラフト黒魔術で召喚できるのであろう神霊が出てくる穴から根源に至ろうとしていました」

橙子は秋の話聞いて眼を見開きながら、煙草を落とした。

「呼び出そうとした神霊はテスカトリポカ。アステカ神話の石柱、創造神の他に悪魔としての側面がある神霊ですね」

「テスカトリポカ……ふん、こんなことなら魔術協会からもつとふんだつておけば良かった」

橙子は新しい煙草をくわえながら、秋に通帳を投げる。

「今回の報酬だそうさ。中を見てみる」

「はあ……はあ?!」

秋は通帳を見ると大声を上げた。

「ぼ、僕の年収より多いね……」

コーヒーを淹れ終わった幹也は秋の通帳を覗き込む。そして、自分の年収より多いことに驚いている。入金された額が額だけに秋の通帳を持つ手が震えている。

「通帳は閉まっとけとよ。……それから、まあ、なんだ、お前が無事で安心したよ」

橙子は煙草を吸いながら秋から顔を逸らす。幹也は小さく笑う。そして、秋は橙子の方を向く。

「……………ただいまです、母さん先生」

「……………おかえり、秋」

集積学園

I

「はあ．．．．．！はあ．．．．．！」

薄暗い何処かの廊下を制服を着た少女が何かから逃げるように走っている。顔は青く、走っている足は今にも纏れて転けそうになっている。

「赦サナイ．．．．．！赦サナイ．．．．．！！才前タチヲ赦サナイ！！」

少女の跡を追うのは白い人形の『ナニカ』。人形の『ナニカ』は一つではない。二つ、三つ、四つ、五つ。人形の『ナニカ』の数はどんどん増えていく。少女が廊下を抜ける頃には『ナニカ』の数は百を越えていた。

「きゃっ．．．．．！？」

少女は廊下を抜け出した先の歩道で何かに引つ張られる形で転んだ。少女は自分の足首が掴まれているような感覚を感じ、足首を見る。そこには――

「ひっ．．．．．！？」

――眼球があるべき場所が空洞になっっている半透明な幼児が嗤っていた。

「いやっ、離して！離しなさいよお！」

少女は捕まれている左足で幼児の頭部を蹴る。蹴られた幼児の頭部は弾けた。だ

「今日は折り入ってお願いがあります」

「お願い……ね。なにかしら？」

「はい。私は今、布仏の分家の意向で I S 学園に通っています」

橙子は眼鏡をはずし、ソファーに座っている虚を睨むように見る。

「ほお？ 魔術師の家系のお前が I S 学園に身を置いたか。……魔術を捨てたか？」

「……はい。元々、両親とは魔術刻印の譲渡で揉めていましたから。これを期に魔術師としての布仏家を終わらせようと思います」

橙子は煙草を取り出して火をつける。紫煙を吐き出し、虚に話を進めるように視線を向ける。

「I S 学園では今、奇妙な事件が多発しています」

虚は I S 学園で起きている怪事件を話始める。

「始まりは半年前です。学園内で幽霊の噂が流れ始めました。私も初めはよくある学校の怪談か何かだと思っていました……」

「……噂の内容は？」

「夜に外を出歩いていると、白い人影を見た……なんて言うよくある話です」

「ああ、確かによくある話だな。巡回の警備員か何かと見間違えたんじゃないのか？」

「警備員が巡回するのは夜の八時までです。幽霊が表れたのは九時以降。噂が流れ始め

て二週間程は生徒も、教師も時期外れな怪談話ですませていました。噂が流れ始めて三週目、その日から事件が起こりました。一人の女子生徒が行方不明になったんです」

IS学園は人工島の上に作られた教育機関。移動手段はモノレールだけだ。

「行方不明になった生徒はすぐに見つかりました。……寮と校舎を繋ぐ歩道で、変死体として、ですが」

「変死体？ 外界と遮断されているIS学園でか？ いや、そもそもIS学園で行方不明者が出ることも事態が異常だ。その生徒は神隠しにでもあったのか？」

「分かりません。ただ、変死体で発見された生徒には微かに呪いをかけられたような跡がありました」

「……ああ、そうか。布仏は代々呪術を生業にしていた家系だったな。その魔術刻印の元譲渡予定だったお前が言うんだ、あながち間違いないだろう。そうすると、IS学園にはお前と同じ魔術師が紛れ混んでる可能性もあるな」

橙子は窓から見える外を見る。世にISが出回ってから、伽藍の堂近辺の工場は悉く倒産していった。鉄やアルミといった物は、IS技術の流用により、鉄より頑丈に、アルミより軽い物質が出回り、鉄産業とアルミ産業

、その他諸々大打撃を受けた。

「それで？ その話と私への依頼、どう繋がるわけだい？」

「……………幽霊の正体を突き止めるために、秋さんをIS学園に派遣してください」
クシャツ、という乾いた音が伽藍の堂に響いた。

「……………それは、私への宣戦布告と受け取れば良いのか？」

元来、蒼崎橙子という魔術師は戦闘能力は高くない。戦闘となれば人形任せ。だが、腕が衰えようが当代最高の人形師にして『冠位』^{グラント}の称号を持つ魔術師。虚に向ける殺意を孕んだ怒気に、虚は身を竦める。

「……………つ！無理を承知でお願いします！魔術師として未熟な私には、今回の異変に対抗できません！秋さんの身を危険に晒すことも重々理解しています！秋さんのサポートは必ず私が成し遂げます！ですから!!どうか秋さんをIS学園に派遣してください!!」

虚は立ち上がって橙子に向かって頭を下げる。橙子は握り潰した煙草を灰皿に捨て、新しい煙草を取り出す。

「……………お前のその依頼は秋に決めさせる。ただし、報酬は前払いだ。アイツが受けると言ったのなら、この場ですぐに報酬を払って貰う。良いな？」

「構いません」

虚はソファアーに座り直し、姿勢を正す。橙子は煙草に火を着け、窓の外を見る。風化し、建物が錆び付いた元工場が伽藍の堂の周りを囲んでいる。伽藍の堂の周囲は何年か

前から自然に出来上がった結界に変わった。工場は潰れ、人は去り、人通りの多い道から逸れた伽藍の堂の立地は、人を寄せ付けないある種の異界となった。

「ただいま戻りましたー」

しばらくすると、手にコンビニのビニール袋を持った秋が帰ってきた。

「先生に頼まれてた物も買ってきましたよ」

「ああ、すまん。釣りはやるよ」

「ありがとうございます。それより、先生がファッション雑誌を頼むなんて珍しいですね。明日は槍でも降りますか？」

「一言多いぞバカ弟子。私とて流行の服装には興味がある」

「なら、春華か更識先輩から借りてくださいいよ。店員に不審者を見る目で見られたんですよ？」

「小娘共の着る服の雑誌なんて読んでられるか。それより、お前に客だ」

「客？……あつ、お久しぶりです」

秋は虚の存在に気がついたのか、軽く会釈する。

「お久しぶりです、秋さん。少々よろしいですか？」

秋は橙子の方を見るが、橙子は我関せずといったように雑誌を読んでいる。秋は小さく息を吐き、虚の対面に座る。

「今日は依頼があつて来させてもらいました」

虚は橙子に話したことを秋に話す。虚の話を聞くにつれて、秋の表情が険しくなっていく。

「……なるほど。I S 学園は立地の関係である種のクローズドサークルに近いからね。孤島で起きた犯人不明、殺人方法がオカルト、そして被害者は増え続ける可能性がある……三文推理小説でありそうな内容だね」

秋はソファアールから立ち上がつて給湯室に入っていく。五分もしない内に手にカップを持つて戻つてきた。

「……いいよ。その依頼、受けるよ」

「ほ、本当ですか!?!」

虚は断られると思つていたのか、秋の答えに驚きで立ち上がった。

「うん。最近はこのといった依頼が無いからね。それに、少しその『幽霊』に興味が出た」
秋はカップに口をつけて喉を潤す。橙子はボタンツツと音を立てて雑誌を閉じる。

「決まりだな、布仏虚。約束通り、報酬は前払いで払つてもらおう」

「はい。これは分家の蔵に保管されていた物を、当主から譲り受けた物です」

虚は足下に置いていた長方形の包みを机の上に置く。虚が包みをほどくと、中から桐の箱が出てきた。桐の箱の蓋を開けると、中には日本刀が納まつていた。秋は日本刀を

手に取り、鞘から刀を抜く。

「叔父の話だとその刀が打たれたのは安土・桃山時代だと聞いています」

秋はすぐに刀を鞘に戻した。橙子も安堵したように息を吐く。歳月を重ねた古刀は古ければ古いだけ、神秘を増していく。橙子が伽藍の堂に張っている結界なのど紙切れの如く切り裂いてしまう。

「その……報酬はその刀で構いませんか？」

秋は橙子の方を見る。橙子は小さく頷く。

「うん、契約成立。五百年近い古刀なんて中々お目にかかれないからね。報酬はしっかりと貰ったし、報酬分の働きは約束するよ」

秋は刀を桐の箱に戻す。

「そうなる問題はIS学園への潜入手段だね……」

秋が所有している魔術礼装は夜天の書一冊と『魔』のみ。IS学園に潜入するには些か心許ない。

「秋。今回は本を使うことを許す。魔術協会、聖堂教会の連中に気付かれない程度に使用え」

「……良いんですか？」

「ああ。だが、多用はするな。入る時と出る時、本当に危険な状態だと判断したのなら、

本を使え。それ以外で使うことは許さん」

「……何の話をされてるんですか？」

秋と橙子の話に虚はついていけない。それはそうだろう。秋と橙子が話している内容は滅びを迎える家系だと言え、聞いているのは魔術師。易々と手の内を晒すわけにはいかない。

「まあ、僕の切り札を一枚切る許可が出たんだよ」

「……秋はそう言つて、微かに口元を釣り上げた。

集積学園

II

(・・・)がI S学園)

I S学園。将来有望なI S操縦者、整備士を育成するための学園。秋はそのエリート校の門の前に立っている。秋の周りをI S学園と本島を繋ぐモノレールから下りてきた新入生が通っていくが、誰一人秋の存在に気づかない。

—————^{ノーフフェイス・メイキング}顔のない王

英雄ロビンフッドの宝具。生涯に渡り顔を、姿を隠して戦ったロビンフッドの逸話が宝具に昇華された物。熱ステルス、光学ステルスの両方を持ち合わせた緑の外套。背景とも同化するため、秋の姿は女子生徒達の視界には映らない。

(布仏さんの部屋は・・・彼処か)

秋は校舎、アリーナ、寮に続く道を姿を消して歩いていく。

『幽霊』の正体が何かは分からない。でも、ある程度の憶測はできる。『幽霊』の正体が尾ひれがついた噂話程度の都市伝説^{アーバンレジェンド}が何かしらの要因で形を得た可能性も捨てきれ

な—————)

秋はとっさに思考を止めて道沿いにある木に隠れた。宝具によって姿を隠していることも忘れて。

「まったく……………あの馬鹿者は」

校舎に向かって一人の女性が歩いていた。レディース物のビジネススーツを着こなし、片手に名簿を持っている。

(姉さん……………!?!?どうして此処に!?)

織斑千冬。それが女性の名だ。秋がまだ、『織斑秋』だった頃の実姉。橙子に引き取られてから秋は千冬に会っていない。その間に千冬はISの国際大会『モンド・グロツソ』で優勝していた。その功績を称え特例としてIS学園の教師をしている。

(……………僕とは関り合いが無い話だね。さよなら、織斑千冬さん)

秋は千冬に気取られないように木々の間を抜けて行つた。その時、秋は小枝を踏んだ。パキッと小さな音がしたが秋は気にしなかった。

「……………?」

ただ一人、織斑千冬だけが反応していたことに、秋は気づかなかつた。

「秋はどこに行つたんですか橙子さん!!」

秋が千冬の姿を確認したのとほぼ堂時刻。伽藍の堂では春華が橙子に詰め寄つていった。

「だから何度も言つてるだろ。秋は仕事だ。しばらくは戻つて来ない」

「それは何度も聞きました!!私が聞いているのはその仕事先が何処か聞いているんです!!」

春華は再度、机を叩く。

「は、春華ちゃん……もう、止めようよ?ね?」

橙子に詰め寄る春華を止めているのは、二年前は肩ほどまでだった髪は背中まで伸び、以前まであつた明るい雰囲気は鳴りを潜め、おどおどとした少女……元更識楯無、本名更識刀奈。

「幹也さん。……なんですけど……」

「……うん、これであつてるよ。業者の方には僕が電話しておくから簪ちゃんは書類の整理をお願いできるかな?」

「わかりました」

今日から伽藍の堂で働き出した簪は周りを無視して先輩の幹也に書類の不備が無い
か確認してもらっている。

「刀奈ちゃんは今秋が何処に行ったか気にならないの!？」

「き、気になるけど……秋君に迷惑がかかるし……」

二年前のことが尾を引いているのか、秋が出会った頃の刀奈の明るさは消え、何かに
怯えるように生活している。

「逆に聞くが、アイツが行っている場所を聞いてどうするつもりだ？」

「もちろん秋を手伝いに行きます!」

春華は二年前より豊かになった胸を張り、橙子に告げる。

「却下だ馬鹿。アイツが行っている場所は呪いに耐性がない人間が行けばすぐに死ぬ。
それほど危険な場所にアイツは行っているんだ」

橙子は煙草を取り出す。

「酷なことを言うようだが春華。お前は秋の足枷でしかないんだ」

「私が……秋の足枷?」

「そうだ。お前と秋はいわばコインの裏表。光と闇、善と悪、陰と陽と言ってもいい。私
たち魔術師は世界の裏側の住人だ。反してお前は世界の表側、光の中の人間だ。秋はお
前や織斑千冬、もう一人いる兄とやらが背負う筈だった業を進んでアイツは背負ってい

るんだ」

橙子は机に肘をつき、手に顎を乗せる。

「魔術師の家系の人間はな、魔術からは逃げる事ができないんだ。どれだけ逃げようと、どれだけ拒もうと、『根源』を指す手段が『魔術』しかないから『魔術という学問』に執着する。まあ、秋は根源などに興味はないがな」

煙草の先端から紫煙がゆらりゆらりと虚空に立ち上る。橙子はその煙を見つめてい

る。「話が逸れたな。春華、私がお前をここに住まわせているのはあくまで秋のメンタルケアのためだ。アイツは起源のせいで壊れやすい。肉体的にも精神的にもだ。私では秋の肉体のケアしかできん。だから、血縁関係にあるお前をここに住まわせているんだ。お前と秋の間に血縁関係が無ければ、秋と接触した時点で秋にお前の記憶を消さしている」

実際、秋が春華を連れてきた時は記憶を消すか一瞬悩んでいた。だが、記憶は消さなかつた。何故か。利用できると思ったからだ。秋の精神を安定させ、魔術の精度をより上げるために。

「お前はこれ以上、こちら側に関わるようなことはするな。さもないと————お前も戻れなくなるぞ？」

橙子は暗に、秋は戻れなくなるほど魔道に染まっていると云った。

IS学園の一室では他のクラス同様、生徒達の自己紹介が行われている。唯一違うとすれば、他のクラスと違い男子が一人混じっていることだ。IS学園の性質上、その男子は明らかな異物だ。

（これは……思った以上にキツイぜ。原作の織斑一夏はこんな状態で自己紹介したのかよ）

もしかしたら、この男は星の異物でもあるのかも知れない。この次元とは違う次元から迷いこんだ魂なのか、事象の流れから外れた者なのか、答えは誰にも分からない。

「それでは皆さん……一年間よろしくお願ひします」

このクラスの副担任、山田真耶が挨拶をするが誰も反応しない。出来ない。何故なら、教壇に立っている女性が異様に寡れているからだ。

（うおっ！アニメでもでかく書かれてたけど、生で見ると尚更でかく見えるな！へっ……この胸も俺の物に出来るなんて、神様サマサマだな！）

ただ一人、織斑一夏は山田真耶の胸元に下卑た視線を向けていて気づかない。本人は

隠しているつもりだろうが、口元には気持ちの悪い笑みが浮かんでいる。

(ここから俺のハーレム伝説が始まるんだ！亡国機業にも篠ノ之束にも邪魔させねえ！！)

織斑一夏「……否、?????は内心から溢れ出る肉欲を感じながら、原作と同じ轍を踏まないように自己紹介を考え始めた。

「……」
神秘ミステリよ、現代科学サイエンスよ、亡霊ゴーストと共に踊り狂え。

「……」
集積学園、開幕

集積学園

III

正午。秋はIS学園が建っている人工島の外周を歩いている。この人工島は元々あった島を日本政府が買い取り、将来のIS操縦者を育成するに相応しい場所に作り変えた。

「この島全体に薄いけど強力な呪いの結界が張られてるのか。魔術師なら対処できるけど、普通の人間にはかなりの毒になるね」

秋は一時間半かけて島の外周を歩き終わり、歩き始めたスタート地点、門の前に戻っている。一時間半歩いて分かったことは強力な呪いを発する結界に島全体が覆われていることだけだ。

「呪術……ではないね。呪術なら起点になる札なり刻印なりがあるだろうし。参つたな……該当する魔術系統が多すぎる。蟲壺こむくでは無いだろうし……」

蟲壺。古代中国がで広く用いられていた蟲を使った呪術。一つの器の中に百種の蛇や虫を入れ、最後の一匹になるまで殺しあわせる。その中で生き残った一匹から毒を採取して、飲食物に混ぜる。毒の効果は思い通りに幸福を得たりすることが出来る。だが、最後に訪れる結末は死だけだ。蟲壺は対人の呪いであって島全体を覆うほど強力な

呪術ではない。

「打てる手は打っておかないとね。さて、久しぶりに魔術師らしいことをするか」

姿を消している秋は再度、校舎に続く道を歩いていく。鼻歌を歌い、指先を空中で文字を描くように動かしながら楽しそうに歩いていく。

—————

時間は少し巻き戻る。星の異物織斑一夏が周りの変化に気づかぬまま時間が流れていく中、織斑一夏のクラスではクラス代表を決めている最中だ。

「待ってください！納得いきませんわ！」

パンツと机を叩く音が教室に響く。金糸のような髪をロールにした少女。少女は端正な眉を不愉快そうに歪める。

—————セシリア・オルコット

それが少女の名前だ。イギリス代表候補生であり、時代の流れに流されている人間の一人だ。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

セシリア・オルコットという少女はイギリスでは由緒ある貴族の家系の生まれだ。だが、それはあくまで表向きのだ。イギリス国内であれば魔術師の総本山『時計塔』に所属する魔術師達の方が遥かに由緒ある貴族だ。三大貴族のバルトメロイ家、トランベリ家、バリユエレータ家。他にもエルメロイ家、エーデルフェルト家、アニメスファイア家等がある。そもそも、魔術とは上流階級……王族や貴族が率先して使用してきた。その点で言えば、魔術の『ま』の字も知らないセシリア・オルコットは他の貴族達からしたら、自身を貴族だと言う彼女を鼻で嗤うだろう。

(チツ……実際に目の前で勝手なこと言われると腹立つな。セシリアなんて原作では良いとこ無しの癖に。コイツの価値なんて精々そのデカイ胸と尻ぐらいだ。ハーレムに加えて、適当に調教したら弾にでもやるか。それに、俺の本命はシャルロットなんだからな！)

織斑一夏は磨耗し、薄れつつある記憶で予め起こることが分かっていたからか、特にセシリア・オルコットの言葉に反応しない。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては耐え

がたい苦痛で————」

(今だ!!)

織斑一夏は原作の再現をしようと立ち上がろうとする。

バンッ!

教室に再度、何かを叩く音が響いた。好き勝手言っていたセシリア・オルコットも原作の再現をしようとしていた織斑一夏も、他の生徒達も教壇の方を見る。

「うっせえな……」

教壇では顔を俯け、手に持った名簿を教壇に叩きつけている山田真耶がいた。

「さつきからギヤアギヤアうるせえんだよ……クソガキ共が……ぶつ殺すぞ?」

「ひっ!」

誰かが小さな悲鳴を上げた。それがクラスの誰かなのか、織斑一夏なのか、セシリア・オルコットなのか、それともこのクラスの担任織斑千冬が上げたのか、誰も分からない。それほど山田真耶から発せられる威圧感に全員が動けなくなる。しばらく山田真耶はクラスの生徒達を睨み付けていると、ふいに糸が切れた人形のように倒れた。

「山田先生！」

織斑千冬は慌てて山田真耶に駆け寄る。軽く山田真耶の体を揺するが、反応がない。「この時間の授業は自習とする！全員、騒がず大人しくしている!!」

山田真耶を担いだ織斑千冬は一喝し、教室から出ていった。

「な、何だよこれ……こんな展開、原作に無ったぞ？」

星^{織斑一夏}の異物は気づかない。必ずしも星が織斑一夏の思い通りに進むとは限らない。

—————

「ふう……」

一日の授業が終わり、寮の自室に戻った布仏虚は扉を閉め息を吐く。

「……………学校はどうだった？」

「きやつ!」

誰も居ない筈の室内に男の声が響き、虚は小さく悲鳴を上げた。

「……………自分で入る許可を出したくせに驚くのは間違いないかい？」

窓際の虚空に緑色の外套を着た秋がジト目で虚を見つめていた。秋は外套を脱ぐ。

すると、外套は緑色の粒子になって消えた。

「しゅ、秋さん……驚かせないでください」

「驚かすつもりは無いんだけど……まあ、良いや」

秋は窓際に置いてあつた椅子を引っ張り出して座る。虚も制服の上着を脱いで、ベッドに座つた。

「報告としては一つ。この島全体に呪いを発する結界が張られている」

「結界……ですか？それなら魔術師としては未熟な私でも気づくはずでは……」

「うん、それが普通なんだよ。この結界は薄いんだ、誰にも感知されないほどね。その癖、呪いの濃度は濃い。この結界を張つた魔術師は一流だよ。それこそ、開位クラスの魔術師が関わっていてもおかしくないくらい」

秋はそう言いながら別のことも考えていた。

（魔術師が黒幕だとして、噂の『幽霊』の説明がつかない。『幽霊』が魔術師の使い魔ないし幻術の類いなら良いとして、神秘の秘匿を怠りすぎている。自分から魔術協会に見つけてくださいって言っているようなものだ）

魔術師達が必要守らないといけないルールが存在する。それは『神秘の秘匿』だ。『神秘』とは『事象の太い流れ』のことだ。『神秘』が一般に知られることは、『事象の太い流れ』が『細い流れ』に変わり、『根源』へと遠ざかる。『根源』へと遠ざかることは、『根源』を目指す魔術師達は忌避する。もし、魔術を一般に知らしめるような事をすれば魔

術協会が黙っていない。

「……うさん！秋さん！」

「……うん？どうかした？」

「いえ、呼んでも反応が無かったので……」

秋の目の前に虚の顔が近づいていた。あと、半歩前に出ればキスが出来るほどの距離だ。

「秋さんはどうして、結界に気がつかれたんですか？」

「……昔、似たような結界に遭遇したことがあるんだよ」

思い出すのはかつての聖杯戦争に参加した英霊。クラスはライダー。ライダーの宝具の一つに結界内の人間を溶かし、自身の魔力に還元するという宝具がある。ライダーの宝具を体験しているから、この人工島に張られた結界に気づけた。

「結界は破壊出来そうですか？」

「まだ、何とも言えないね。一応、ルーン文字を三千ほど刻んで来たけど、この結界の主に気づかれてるかもね」

「さ、三千……っ!? そんな数のルーン文字を半日ほど刻んだんですか!？」

「そんなに驚くこと? 先生なら一日あれば三十万文字ぐらい刻めるよ」

秋は橙子の教えを受け、ルーン魔術をある程度開得している。ただ、魔術師とし未熟

な秋はルーン文字を効率良く配置するのに時間がかかるため、三千文字しか刻めなかった。

「朝を待つて、次の手を考えるよ」

—————

夜十時。人工島に白い『ナニカ』が現れた。『ナニカ』達の数は増えていき、今宵も獲物を探して歩き出す。『ナニカ』の一人が木と木の間を踏み入れた瞬間、木にルーン文字が浮かび上がった。『ナニカ』の足元にもルーン文字が浮かび上がる。一つではない。『ナニカ』の足元全てにルーン文字が浮かび上がる。

—————ヒュン！

突風が木々の間を吹き抜ける。ザシユ、という音が響いた。『ナニカ』は半透明な体を上下に切断された。一体だけじゃない。IS学園がある人工島の至るところで突風が吹く。一体、また一体と『ナニカ』達は姿を消していく。やがて、『ナニカ』達の姿は無くなった。

集積学園

IV

翌朝。織斑一夏には I S 学園の生徒達は前日と変わらず登校しているように見えている。世界は少しずつ、確実に変化しているのに、織斑一夏は気づけない。

「山田先生はしばらくの間、休職される。山田先生が担当されるはずだった全ての授業は以降、私が担当することになった。質問があるものは居ないな？では、今日の授業を開始する」

織斑千冬は山田真耶が休職することを淡々と告げ、授業を始める。他の生徒達も内心でホツとしている。昨日の山田真耶から発せられた殺意は生徒達に深い傷を残していたからだ。

（ふざんけんなーこんな展開、原作には無かった!!どこのどいつだ!!俺のハーレム伝説を邪魔するゴミ野郎は!!必ず見つけ出してぶつ殺してやる!!）

織斑一夏は気づかない。自分が一番の異物だと言うことに。彼の英雄王が『織斑一夏』の姿を見たら、醜悪と断じ、即殺されていただろう。それほど、『織斑一夏』の魂は磨耗し、淀み、薄汚れていた。

（まあ、良い。山田先生が居なくなったとしても、俺のハーレム伝説には支障はねえ。箒

はとつくに俺にベタ惚れだろうし、鈴はもう喰つてる、セシリアは気に入らねえが喰つてから適当に調教して弾にやれば良い。シャルロットはじっくりと可愛がつてやる。俺はロリコンじゃねえがラウラもメインヒロインだからな、喰つてから地元の不良どもに回せば良いか)

何度も言うが、織斑一夏は気づかない。彼のいう原作なら、昨日の時点で二人の少女が彼に接触しているはずだった。だが、彼に接触しているのはセシリア・オルコット一人だけ。すでに原作から解離していつてることに、織斑一夏は気づいていない。

「……………」

窓際の席に座る少女は冷めた視線で織斑一夏を見ている。

(……………気持ち悪い)

少女は視線を織斑一夏から外し、机に視線を向けながらそう思っていた。

—————篠ノ之箒

ISの生みの親、篠ノ之東の実妹。彼女の実家は神社であり、生れつき靈感が強い。実姉の篠ノ之東より、靈感が強いだらう。そのためだろうか。彼女は織斑一夏に本能的な嫌悪を感じていた。

(……アイツじゃなくて、秋がISを動かして、春華もIS学園に入学していれば、あの頃のようにまた、三人で楽しく過ごせていたのだろうか?)

篠ノ之箒は夢想する。遠い過去、過ぎ去った温かな日常を。篠ノ之箒はISなど望んでいなかった。篠ノ之箒が望んだモノ。それは、平凡で、温かな日常だった。

—————篠ノ之箒は夢想する、このIS^{鳥籠}学園で。

「ルーンが消えてる……『幽霊』が現れたのか」

秋は昨日設置したルーンがある場所を訪れていた。

「手がかりなし……困った」

秋はフードの上から頭を搔く。

「昨日現れた『幽霊』は撃退できたことは出来たみたいだね。……ルーン魔術で撃退できる存在を『幽霊』と言っているのかは疑問だけど」

そもそも『幽霊』とは厳密に言えば不可視の存在では無い。『幽霊』とは人間が死に逝くとき肉体、陰性の『魄』から離れた陽性の『魂』が天に昇る過程において、『魂』が現世への未練、まだ生きたいという執念がギリギリ形をなした存在。知性はなく、ただ虚ろに彷徨う浮遊霊となる。霊感がある人間や霊脈の流れが強い場所ではうつすらとだが視認することが出来る。だが、『幽霊』のカテゴリーの中で最も質が悪いのが憎悪に染まった『魂』だ。

「……少し攻めてみるか。術者にも会えるかも知れないし」

昨夜と同じように『風』のルーンを刻みながら、木々の間を歩いていく。まだ見ぬ魔術師との殺しあいを想像しながら。

「秋さんは……何故、進学されなかったんですか？」

「……唐突だね。別にこれといった理由はないよ」

夜。『幽霊』が出現する時間まで秋は虚の部屋で待機していると、虚が話しかけてき

た。

「蒼崎さんは何も言われなかったのですか？」

「何も。先生とは戸籍的には親子つてことにはなつてるけど放任主義的などころがあるからね。進学するかしないかは自分で決めろつてさ。だから、僕は進学しなかった」

もちろん、担任の教師や同クラスの何人かが進学するように勧めてきたが、秋は進学の話を蹴つた。

「………魔術師だからですか？」

「それもあるね。僕は士郎さんや凜さんみたいに器用じゃない。非日常人殺しをしながら、日常を過ごすことなんて出来ない」

魔術師は闇に生き、闇で死ぬ。光の中で生きている人々は秋にとって、眩しすぎる。手を伸ばそうと、届かぬ世界なのだから。

「時間だね。布仏さん、窓を閉めきつてカーテンを引いておいて。妹さんにも伝えておいて」

秋は緑の外套を羽織り、窓を開けて出ていった。



「これが『幽霊』か……数が多いな」

校舎に続く歩道には『ナニカ』達……秋や虚が『幽霊』と呼んでいた者達が歩いてた。

「襲つてこない……?」

『幽霊』達のほぼ真ん中と言っていい場所に秋は立っているのに、『幽霊』達は襲いかかつてくるどころか、秋の横を素通りしていく。

「まさか……」

秋は一つの可能性を思い付かんだ。それが外れていてほしいと願い、腰から鎖で吊るしている『夜天の書』を起動する。『夜天の書』のページが勢いよく捲れていき、とある英霊のページで止まった。

『宝具展開……己が栄光の為でなく』
フォー・サムワンス・グロウリー

秋の姿が黒い霧に覆われていき、やがて姿を変えていく。霧は晴れ、そこには伽藍の堂の居候の一人、『織斑春華』が立っていた。

「女……!」

「女ダ!」

「殺セ!!殺セ!!殺セ!!殺セ!!殺セ!!殺セ!!殺セ!!殺セ!!殺セ!!殺セ!!」

『幽霊』達は『織斑春華』に襲いかかる。『織斑春華』に一番近かった『幽霊』は『織斑

春華』に触れようと半透明な手を伸ばす。

「ふっ！」

一閃。半透明な『幽霊』の手は『織斑春華』が両手に握っていた陰陽二振りの短剣が切り落とした。

「……………そうか。お前達は、君達は……………」

『織斑春華』に化けていた秋は春華の姿のまま、『幽霊』達に憐憫の視線を向ける。

「でも、依頼は依頼だ。君達は現世に留まっついてはいけけない」

秋は干将で目の前の『幽霊』を切り裂く。莫耶を投擲、奥から走ってくる『幽霊』の胴体を切り裂く。

「オオオオオオオオオ！」

「……………っ！^{セツ}起動せよ、^ト身体強化・Ⅱ」

後ろから掴みかかろうとする『幽霊』を魔術で強化した脚力でバック転するように飛び上がり、『幽霊』の背後に立つ。『幽霊』は振り返ろうとするが、投擲された莫耶がブルーメランのように戻ってきて、『幽霊』の胴体を再び切り裂く。

「はあっ！」

左右から迫る『幽霊』を斬り捨て、近くの木に飛び乗る。

(本当は使いたくないけど……………)

秋は『太陽』のルーンを空中に書く。ルーンは太陽の如き光を放ち、木の回りに集まっていた『幽霊』達を消し去っていく。

「・・・・・・・・ふう」

秋を黒い霧が包み、春風の姿から秋の姿に戻った。辺りに『幽霊』が居ないことを確認して、木から飛び降りる。

「女ハ・・・・・・・・死ネエエエエエエエ!!!」

「しまっ!?!」

木の裏に隠れていたのか、『幽霊』の一人が秋を掴まえようとする。秋はとつさに身を引くが、『幽霊』の指先が顔を掠めた。その瞬間、『幽霊』の記憶呪いが秋の中に流れ込んできた。

『ちよつとアンタ。今、私をいやらしい目で見てたでしょ?』

『えっ?み、見てないですよ』

『嘘つくんじゃないわよ!誰か来てください!!この男にレイプされそうになりました!!』

『幽霊』の記憶呪いの中で女性が男性の腕を掴み上げ、大声で叫ぶ。回りはショッキングモール。目撃者は大勢いるが誰も助けようとしなない。二人から目を反らし、足早に去っていく。

『何の価値もないアンタみたいな男はレイプ魔の汚名でも背負って死になさい、屑』

女の口元に嘲笑を浮かべ、その場を去っていく。その後はトントン拍子で話が進んでいった。男性は警察に連れていかれ、証拠不十分で釈放された。だが、男性の人生はこの事件のせいで、レールを外れていった。

『女が憎い……！！ISが憎い……！！篠ノ之束が憎い……！！白騎士が憎い……！！』

「……………！！！！」

秋は黒鍵で『幽霊』の首を切り落とした。『幽霊』は霞のように消えていった。

「はあ………はあ………！！」

秋は顔を青くし、荒い息を吐く。それほど、『幽霊』の記憶呪いは強烈だった。女性への怨念、ISを生み出した篠ノ之束への憎悪、生者への嫉妬、負の感情が秋の中に流れ込んでいた。秋はとつさに橙子に叩き込まれた精神防御の魔術を使い、『幽霊』の精神汚染を防いだ。

「きつついなあ………」

秋は氣力を振り絞り、太い木の枝に飛び乗る。幹に『太陽』のルーンを刻み、幹に体を預け、目蓋を閉じていく。『幽霊』から流れ込んできた記憶呪いを忘れるように。

集積学園

V

「春華。お前は今のISSをどう思う」

「別に……どうも思いません。あんなもの、作られなかったら良かったんだ」

秋がISS学園に潜入しているとき、伽藍の堂では橙子が春華にISSをどう思うか聞いていた。春華は吐き捨てるように、呟いた。

「ほお？だが、お前の姉はそのISSで世界最強ブリュンヒルデという不遜な称号を得た筈だが？」

「不遜……ふふっ、確かにそうですね。お姉ちゃんがISSの大会なんかで優勝するから、私は行く場所全てが嫌だった。どこに行っても私は『織斑千冬の妹』としか見られなかった。誰も、私を『織斑春華』とし見てくれなかった！お姉ちゃんには感謝してる。友達の誘いを全部断って働いて、私と一夏を養ってくれた。でも、お姉ちゃんがISSなんか乗らなかつたら、束さんがISSなんか作らなかつたら、私は『織斑春華』で居られた!!」

春華は声を荒げて叫ぶ。春華にとつて、織斑千冬は愛憎入り交じった複雑な感情を抱いている。育ててくれた感謝の念、『個』を奪った憎しみ、色々な感情を抱いている。

「そもそも、ブリュンヒルデとは北欧神話に登場する大神オーディンの娘だ。戦乙女ワルキューレの

一人であり、北歐神話において悲劇の女として語られている。詳しい話は省くが、いち人間ごときがブリュンヒルデを名乗るものでは無いな。秋に知られれば間違ひなく殺されるな」

橙子は煙草を吸いながら卓上の図面を見下ろす。図面には円柱型の建物の絵が書かれている。

「篠ノ之束だったか、ISの製作者は？」

「はい。自他ともに認める天才。時代の先駆者。それが束さんです」

「時代の先駆者……ね」

橙子は何が可笑しいのか笑い声が溢れている。

「なあ、春華。お前は重力という概念を一番始めに見つけた人間を知っているか？」

「ニュートンですよ。万有引力って言うのを見つけた」

「そうだ。なら、次に電気を見つけたのは？」

「えつと……エジソンですか？」

「惜しいな。エジソンではない。だが、同時代ではある。ニコラ・テスラだ」

橙子は煙草を灰皿に押し付ける。

「そもそも、篠ノ之束は本当に一からISを作り出したのか？」

「はい。昔、こっそり束さんの実家にある蔵に忍び込んだ時、一人でISを作っていました

た」

「私が言っているのはそう言う意味じゃないんだ。春華、電動ドリルは何で動いている？」

「電気です」

「そうだ。その時点で篠ノ之束は一人じゃないんだ」

橙子は机の上に置いてあつた紙にペンを滑らせていく。

「篠ノ之束の I S 開発は確かに一時代を進歩させる偉業だろう。だがな、コンピュータを始めに考案したチャールズ・バベツチがいなければ I S の誕生は今より後の時代だっただろう。ニコラ・テスラが電気を地上に墮とさなければ、今日の電気文明は無く、今も石器時代のような生活をしていただろうな」

「それは……嫌ですな」

春華は石器時代の生活を想像したのか顔をしかめる。

「生まれながらに天才だろうと、環境、性格、人間関係、有りとあらゆる要素に左右される。その点でいえば、篠ノ之束は何者にも左右されない孤高の天才なんだろう」

「孤高であるがゆえ理解者など不要。天才と凡人は交わることは無いのだから。」

—————

「……………つう」

『幽霊』に触れられて三日が過ぎた。『幽霊』の記憶呪いは今も秋の体を蝕んでいる。秋は外套の内側からスマートフォンを取り出し、ある場所に電話をかける。

『……………何のようだ、馬鹿弟子』

「……………開口一発目から馬鹿弟子は酷くないですか？」

電話の相手は橙子だ。

『それで？お前が電話をかけて来るほどだ。余程のことなんだろう？』

「……………人間の魂は死後、どうなりますか？」

『ふむ……………基督教ならば人間は死後、善性の魂と悪性の魂は選別され、善性の魂は天国と呼ばれる場所に運ばれ、次の生命に生まれ変わる。逆に悪性の魂は地獄に落とされ、地獄の刑罰を受けるといふ。だが、お前の聞きたいことはこういうことでは無いだろう？』

「はい。昨日、『幽霊』と接触しました」

『なに？不快感や倦怠感はないか？呪いによる幻聴や孤独感は？』

ガタツ！という音が聞こえてきた。珍しく橙子は動揺したのか、椅子から立ち上がったのだろう。

「大丈夫です。『幽霊』に触れた時、『幽霊』の記憶が流れ込んできました。ISへの憎しみ、篠ノ之束への憎悪、生きてる人間への嫉妬。僕の推測ですけど、『幽霊』の正体は、死んだ人間の負の感情が集まった者だと思えます。でも、そんなことあり得るんですか？」

「……今の世界の状態から考えればあり得る話だ。前に話したことがあると思うが、死んだ魂が必ずしも綺麗に成仏するとは限らない。現世への怨みが一つ二つなら大したことはない。神社や教会にでも行って祓ってもらえば済む話だ。だが、それが百や二百に増えると問題だ。怨みの集合体は、霊長に絶対的殺戮権を有する化け物になる。そうなれば、たとえ神話に名高い英雄だろうと、人に属する限り勝機はない」

死徒二十七祖にも『ガイアの怪物』と呼ばれる抑止力の魔獣がいる。

『絶対的殺戮権を得られるより早く『幽霊』、いや、『無間』とも呼ぼうか。『無間』が霊長類を確実に殺せる所に手をかけるより早く、『無間』を滅ぼせ』

「……分かりました。今晚、『無間』を仕留めます」

『ああ。……IS学園から帰ってきたら、久しぶりに二人だけで出掛けるか』

「そうですね。海が見える旅館とかどうですか？」

『ふっ……なら、予約しておいてやる』

橙子は其れだけ言うとうと電話を切った。秋も小さく笑い、スマートフォンを外套の内側

「……………一番、二十四番起動」

秋が入ってきた入り口に『財産』のルーンが、逆の入り口に『遺産』のルーンが現れる。一番フエフに続いて二番ウルズ、三番スリスズと刻まれていく。二十四番からは二十三番ザガズ、二十二番ズグズと刻まれていく。

「ぐっ………！」

秋の頬に汗が流れる。橙子なら事も無げに『ルーン文字にルーン文字を書かせる』ことが出来るだろう。だが、秋はそこまでの境地に達していない。秋は橙子の技術を模倣し、改良した。ルーン文字で最初に来る一番フエフと最後の二十四番オースイラをあらかじめ対面の位置に書いておき、一番フエフと二十四番オースイラの中心から魔力を流し、時計回りでルーン文字を書くように改良した。ただし、大量の魔力と集中力を消費する。

「……………全ルーン、起動！」

全てのルーンが一齐に光だす。ドカンッ!!と全てのルーン文字が爆発し、観客席を埋め尽くしていた『無間』を吹き飛ばした。観客席を黒煙が覆い、秋の視界を埋め尽くす。「やった………のか?」

秋は立ち上がり、春華の姿から元の姿に戻った。

「オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ

集積学園

VI

「あ………うう………」

「鷹月!? どうした! しっかりしろ!!」

学生寮では部屋や廊下、風呂場などのあらゆる場所で生徒達が倒れていく。『無間』の咆哮は島全体に轟き、呪いに耐性が無い人間は一瞬で命を奪うほどの力を、咆哮は孕んでいた。死なないのは秋が学生寮の回りに書いておいた三百を越える『比護』のルーンのおかげだ。

「一体………この学園でなにが起こっているんだ!」

「お姉ちゃん………」

「大丈夫、大丈夫だからね本音。秋さんがきつと解決してくれるから」

学生寮の一室では本音が虚に抱きつき、虚はそんな本音をあやしている。

(………秋さん)

虚は本音を撫でながら、目を瞑る。大切な友人の無事を祈りながら。

『無間』は一つに集まってから動かない。長い指を小刻みに動かしながら、空洞の瞳で秋を見つめている。

(一気に吹き飛ばしたからか、外殻だけ吹き飛んで中の残留思念が集まったのか)

秋は立ち上がり、干将・莫耶を構える。

『何故ダ！何故ジャマをする!?男のお前ガ何故、女どもヲ護る!?!』

幼児のような、青年のような、年老いた老人のような声が『無間』から発せられる。

「別に、この学園にいる人間を護るつもりはない。ただ、依頼だからね。報酬を貰ったからには働くさ。だから、君を滅ぼす」

『ふぎケルナ!!俺達僕は不滅だ!!この胸ノ内をコガス憎悪あるかギリ、私達俺は尽キルコトハ無イ!!』

「この世界に不滅なものなんて存在しない。神秘は衰退し、いつか消える。人間の憎しみも、妬みも、嫉妬も、時が進めば使い果たして消えてなくなる。どんな偉業を成し遂げた英雄だろうと人は忘れる」

科学が進歩した現代において、誰が神話を彩る神仏・英雄を信じるだろうか。神仏なぞ架空のものど笑ひ、英雄を架空の人物として見る。

『忘れ口ト言うの力!? I S に乗れルだけトイウだけで威張ル女共への憎悪を!!俺僕ヲ見捨てた人間タチへの怨みヲ!!』

「そうじゃない。思い出してほしいんだ。確かに君たちが死んだのは I S 傲慢な女性達のせいかも知れない。でも、そんな人間ばかりじゃないはずだ。君たちを助けようとした女性は? 見捨てずに支えようとしてくれた人間?」

『いなカツタ!! 誰モ、誰モ、ダレモ、ダレモ、助けテくれなカツタ!! だから殺ス!! 一人残ラズ殺す!! 殺すコロスコろす殺す!!』

それは逆恨みに近かった。だが、理性を失い、自我を損壊した『無間』には逆恨みだと判断できない。

「そう.」

秋はため息を吐く。腰からぶら下げていた夜天の書の表紙が開いていく。

「なら. 問答はこれで終わりだ」

「.!!」

『無間』は秋に向かって巨大な手を振り下ろす。当たれば秋の肉体は潰れ、絶命するだろ

????? 当たられば、だが。ガガガガッ!! と重低音がアリーナに響いた。

『無間』は突然の衝撃に手を戻した。秋がいた場所からプシューと空気が抜ける音と白煙が上がった。

「宝具の弾丸は効くんだ」

秋は棺桶を構えていた。棺桶から白煙が上がっており、秋の回りには空薬莖が落ちて
いる。

————超過剩武装多目的棺桶

世界的推理小説シリーズ『シャーロック・ホームズ』の登場人物にしてホームズ最大の宿敵、ジエームズ・モリアーティとシャーロック・ホームズが共に落ちたとされる滝
壺と同じ名前の宝具。

『無間』の体に瘤のような物が浮かび上がり、瘤が割れると小型の『無間』が這い出てきた。

「増殖能力もあるのか。これは長期戦になるかな?」

秋は小型の『無間』に狙いを定め、棺桶の引き金を引く。棺桶の下部が開き、銃口

ハハッ!!」

「……死んだのなら早く成仏すればいいものを。どれだけ深い怨念なんだよ」
 今もなお『無間』の本体から小型の亡霊が這い出てくる。

「この宝具じゃギリ貧か……なら!」

棺桶は粒子となって消え、腰から下げている本が新たなページを開く。秋の手に黄金色の一振りの刀が握られていた。秋は刀を鞘から引き抜く、頭上に掲げる。

「草紙、枕を紐解けば音に聞こえし大通連。いらかの如く八雲立ち、群がる悪鬼を雀刺し———文殊智剣大神通、天鬼雨!!」

刀は分裂していき、やがてアリーナの半分を覆った。刀達は一齐に刀身を地面に向け

「待っ!!」

分裂した刀達が一斉に地面目掛けて降り注ぐ。『無間』から産み出されている亡霊を貫き、『無間』本体を穿っていく。

『無間』は自身の体が削れていくのを感じ、悲鳴を上げる。

刀の雨はやみ、『無間』の体は半分ほど崩れていた。亡霊を産み出そうとするが瘤が破

裂するだけだった。

『なゼダ……ドウシテ……神ヨ。何故、我ら僕らニこのヨウな試練ヲ……』

『無間』は崩れ落ちる手を夜空に伸ばし、弾けて消滅した。

「……神様なんて自分勝手な概念的存在だ。神様は誰も……救わない」

秋の脳裏に恋した少女の姿がよぎる。神の声を聞き、故国を救わんと立ち上がり、最後には魔女の烙印を押され火刑に処された聖女の姿が。

集積学園

了

「……」ことの顛末を語ろう。I S 学園は少数の犠牲を出すに止まり、一週間の間休校となった。表向きにはガス管の劣化によるガス漏れの危険性を考慮してのとこだが、実際は教師生徒に関わらず二十人程の犠牲を出していた。その中にはイギリス代表候補生セシリア・オルコットが含まれていた。彼女は運悪く秋と『無間』の戦闘が行われているアリーナの近くを通りかかってしまった。『無間』の咆哮はそれだけで人間を呪殺する怨嗟の塊。セシリア・オルコットはその咆哮をほぼ至近距離で聞いてしまい、精神が崩壊、発狂死してしまった。セシリア・オルコットだけでなく、校舎で残業をしていた教師も同様に発狂死しているのを発見された。それはまるで「無間」の置き土産のようだった。

「詰めを怠りすぎたな、馬鹿弟子。まあ、依頼自体は終わったんだ問題ないだろ」
「はい……まさか、校舎に教師が残っているとは思いませんでした」

秋はそういいながら手元の黒鍵の刃を布で磨いている。そこにはまるで、罪悪感など感じられない。

「まあ、もう終わったことです。死んだことには同情しますが、それはそれです」
秋は黒鍵の刃を消して机に置く。

「淡白だな」

「ええ、魔術師ですから」

橙子は煙草を啜えながら図面を描いている。秋はそんな橙子のことを見ている。

「……珍しく建築家としての仕事ですか？」

「そうだ。オフィスビルの図面を描いて欲しいだとき」

橙子はため息を吐き、ペンを進ませる。秋はそんな橙子のことをボーと見つめていている。

「……なんだ馬鹿弟子。暇なら魔術の練習でもしている」

「いえ……先生が建築家の仕事をしてところを見るのが久しぶりで、ちよつと見てたくなりました」

「なんだ、その馬鹿げた理由は」

橙子が啜えているタバコから煙が立ち上る。伽藍の堂に住み始めた当初は煙草の臭いを嫌っていたが、慣れとは恐ろしく、今では橙子が吸っている煙草の臭いを嗅がない

と落ち着かない時がある。

伽藍の堂とほぼ同時刻。冬木市にある民家の一室、そこでは二人の男女がいた。男————織斑一夏は表面上友人として接している男の妹を家に引き込み、淫らな行為にいそしんでいる。

(ちくしよう……!!ちくしよう!ちくしよう!ちくしよう!ちくしよう!ちくしよう!ちくしよう!!ちくしよう!!!)

「い、いちかしゃん……は、げしすぎっ!」

いや、やり場の無い怒りを性欲に変えてぶつけているようだ。組伏せられている女は喘ぎ声を上げながら抗議するようなことを言うが、顔は快楽に染まっている。

(どこのどいつだよ、俺のハーレム要員を殺した奴は!!絶対に見つけ出して殺す!!殺してやる!!)

実際のところ、セシリア・オルコットが半ば死んだのは自業自得によるものが大きい。本来なら生徒が寮の外に出れる時間は決まっている。それだけでなく、変死体が見つかってはより一層寮の外に出るのは厳しくなった。そのルールを知らながら、セシ

リア・オルコットは少しだけなら、と寮の外に出た。

(俺が主人公なんだ!!俺の邪魔をする奴は全員敵だ!!)

「あつーーーああああああーっ!!!」

織斑一夏は居もしない相手に怒りを抱きながらーーー女の中で果てた。